岐阜県文化財保護センター
調査報告書　第 153 集

大　屋　敷　遺　跡

２０２１
岐阜県文化財保護センター

大屋敷遺跡（おおやしきいせき）

2021

岐阜県文化財保護センター

序

美濃市大矢田は、岐阜県の中央南部に位置する美濃市の南西端に位置し、山間盆地が広がる地域です。当地域は長良川の右岸にあたり、古事記の喪山神話に関する伝承地が数多く所在することで知られ、国内最古とされる縄文時代草創期の水場遺構が確認された渡来川北遺跡等が所在するなど、県内の歴史を考える上で非常に重要な地域であるといえます。

このたび、岐阜県美濃土木事務所による主要地方道岐阜美濃線道路改良工事に伴い、大屋敷遺跡の発掘調査を実施しました。大屋敷遺跡は、長良川の支流である渡来川により形成された段丘上に位置する遺跡です。今回の発掘調査では、縄文時代の土器や石器を伴う土坑などを確認し、地域の歴史を知るうえで重要な成果が得られました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、美濃市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

令和２年３月

岐阜県文化財保護センター
所長　森 勝利

例　言

1　本書は、美濃市大字大矢田に所在する大屋敷遺跡（岐阜県遺跡番号 21207-9208）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、主要地方道岐阜美濃線道路改良工事に伴うに伴うもので、岐阜県県土整備部美濃土木事務所から岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課が依頼を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　発掘作業及び整理等作業は令和元年度に実施した。

4　発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆及び編集は辻田真穂が行った。

6　発掘作業における現場管理、掘削、測量などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記、整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、橋本技術株式会社に委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　花粉分析及びプラント・オパール分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行い、第４章に掲載した。第４章第１節は辻田が執筆した。

9　発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

石井里英、藤澤良祐、三島美奈子、美濃市教育委員会

10　本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。

11　土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

12　調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目次

序
例言
第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯・・1
　第２節　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境・・5
　第２節　歴史的環境・・6
第３章　調査の成果
　第１節　基本層序・・・10
　第２節　遺構・遺物の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第３節　遺構・遺物・・13
　　遺構一覧表、遺物観察表、発掘区全域図
第４章　自然科学分析
　第１節　分析の概要・・26
　第２節　SK16 の花粉分析及びプラント・オパール分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第５章　総括・・29
引用・参考文献・・・31
写真図版
報告書抄録

挿図目次

図 1　大屋敷遺跡位置図・・・・・・・・・・・2
図 2　試掘坑と発掘調査区の位置・・・・・・2
図 3　地区割り図・・・・・・・・・・・・・・3
図 4　遺跡周辺の地形・・・・・・・・・・・・5
図 5　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・7
図 6　発掘区北壁土層断面図・・・・・・・・・10
図 7　土坑分類模式図・・・・・・・・・・・・11
図 8　SD01・SD02・・・・・・・・・・・・・・14
図 9　SK05・SK16・・・・・・・・・・・・・・16
図 10　SK16 遺物出土状況・・・・・・・・・・・17
図 11　SK16 出土遺物　・・・・・・・・・・・・17
図 12　SK01～SK04・SK06～SK09 ・・・・・・・19
図 13　SK10～SK15・SK17 ・・・・・・・・・・20
図 14　その他の出土遺物 ・・・・・・・・・・22
図 15　発掘区全域図 ・・・・・・・・・・・・・25
図 16　植物珪酸体分布図・・・・・・・・・・・27
図 17　周辺の地籍及び字絵図 ・・・・・・・・30

表目次

表 1　周辺遺跡一覧（1）・・・・・・・・・・・7
表 2　周辺遺跡一覧（2）・・・・・・・・・・・8
表 3　遺物点数 ・・・・・・・・・・・・・・・12
表 4　溝状遺構一覧表 ・・・・・・・・・・・・23
表 5　縄文時代の土坑一覧表 ・・・・・・・・・23
表 6　時期不明土坑一覧表・・・・・・・・・・23
表 7　土器類観察表・・・・・・・・・・・・・24
表 8　石器・石製品観察表・・・・・・・・・・24
表 9　試料１g 当りのプラント・オパール個数 27
表 10　大屋敷遺跡周辺の縄文時代の遺跡・・・29

挿入写真目次

写真 1　発掘作業風景・・・・・・・・・・・・・4
写真 2　SK16 出土縄文土器の取上げ作業　・・・4
写真 3　SK16 から産出した植物珪酸体・・・・・28

写真図版目次

図版 1　調査前風景・発掘区全景
図版 2　SD01・SD02
図版 3　SK16 断面・完掘
図版 4　その他の検出遺構
図版 5　出土遺物

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

大屋敷遺跡は、美濃市大字大矢田に所在し（図１）、遺跡の南側を東流する渡来川により形成された河岸段丘面上に立地する。平成７～10 年度に実施された美濃市教育委員会による遺跡詳細分布調査によって山茶碗や陶器が採集された。

主要地方道岐阜美濃線道路改良工事に伴う県道 94 号線拡幅工事の実施に先立ち、大屋敷遺跡の南隣接地を「大屋敷遺跡近接地」として、平成 29 年８月に岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課が試掘・確認調査を実施した。現道の北側に沿って TP１～４の試掘坑を設定して調査したところ（図２）、TP３から遺物包含層及び遺構の可能性がある掘り込みを確認した。この結果をもとに、平成 29 年８月 29 日に実施した岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において、本発掘調査が必要との意見がまとめられた。また、この意見に基づき、平成 30 年度に大屋敷遺跡の範囲が変更された（平成 31 年２月１日付け文伝第 81 号の 34）。

本工事は、文化財保護法第 94 条第１項の規定に基づき、美濃土木事務所長から岐阜県知事（以下、「県知事」という。）あて埋蔵文化財発掘通知（平成 31 年３月 18 日付け美土第 511 号）が提出され、同条第４項の規定に基づき、県知事は同事務所長あて発掘調査の実施を求める勧告（平成 31 年４月１日付け文伝第 94 号の６）を通知した。本発掘調査は、県単街路事業都市計画道路高富美濃線に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、美濃土木事務所長が県知事に依頼し、平成 31 年度（令和元年度）100 ㎡を対象に岐阜県文化財保護センター（以下、「センター」という。）が実施した。センターは調査着手後、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく発掘調査の報告（令和元年５月 15 日付け文財セ第 105 号）を県知事に提出した。

第２節　調査の方法と経過

１　調査の方法

グリッドの設定　遺物取り上げ等に用いる調査グリッドの設定は、世界測地系の座標に基づき、一辺５ｍの区画とした。X=-51,885、Y=-26,175 を原点として以東を割り付け、南北をＡ～Ｃ、東西を１～５に分割した（図３）。

掘削作業　表土掘削を重機、遺物包含層以下を人力により掘削した。遺構の掘削は、土坑は半割、溝は土層観察用畦を残して掘削を行い、埋土の堆積状況を記録したのち、遺構全体の掘削を行った。

記録作業　遺構には、原則として検出順に通番を付し、「S01」というように「S」と２桁の数字により表記した。この番号は、整理等作業時に遺構種別ごとに番号を振り直した。

遺構等の実測作業は、原則として平面図はデジタル測量、土層断面図は手測り測量にて、実測図を作成した。図面の縮尺は、20 分の１とした。

出土遺物は、遺物包含層出土遺物をグリッド単位、遺構出土遺物を遺構単位で取り上げた。遺構出

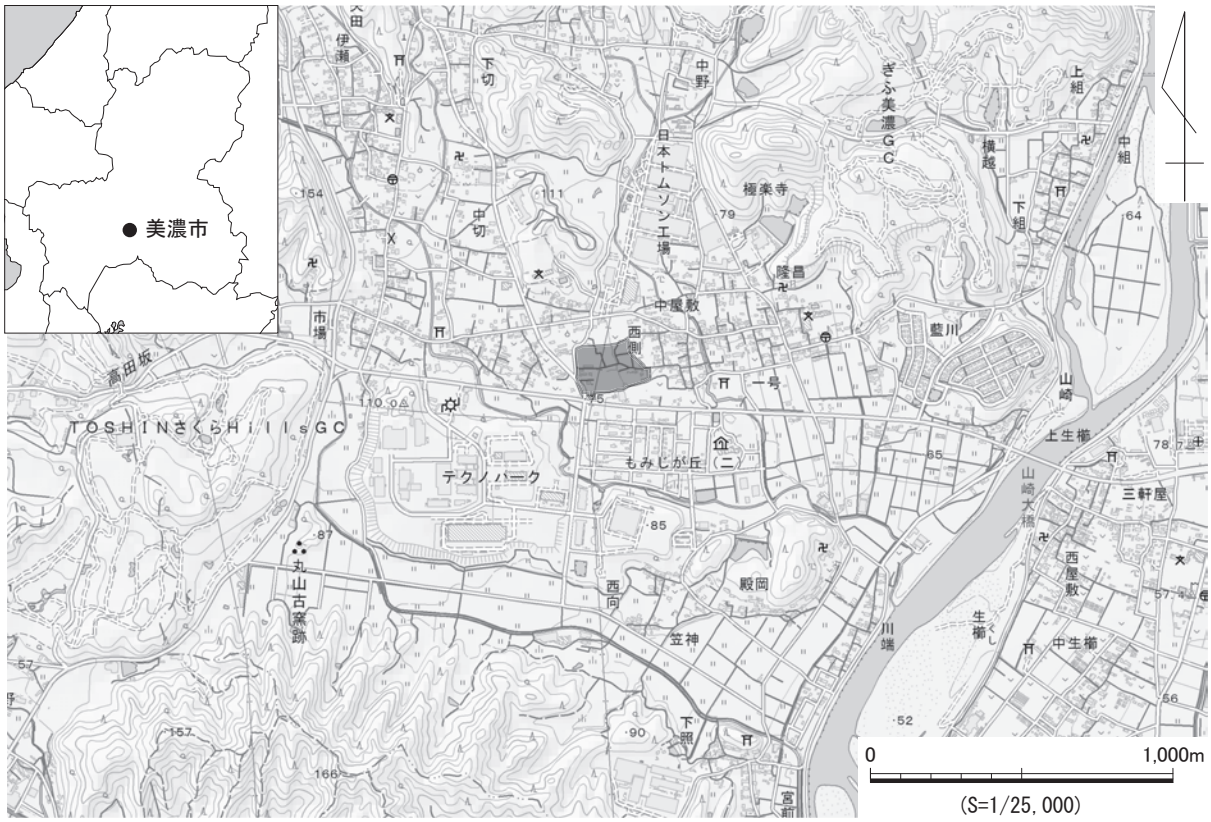
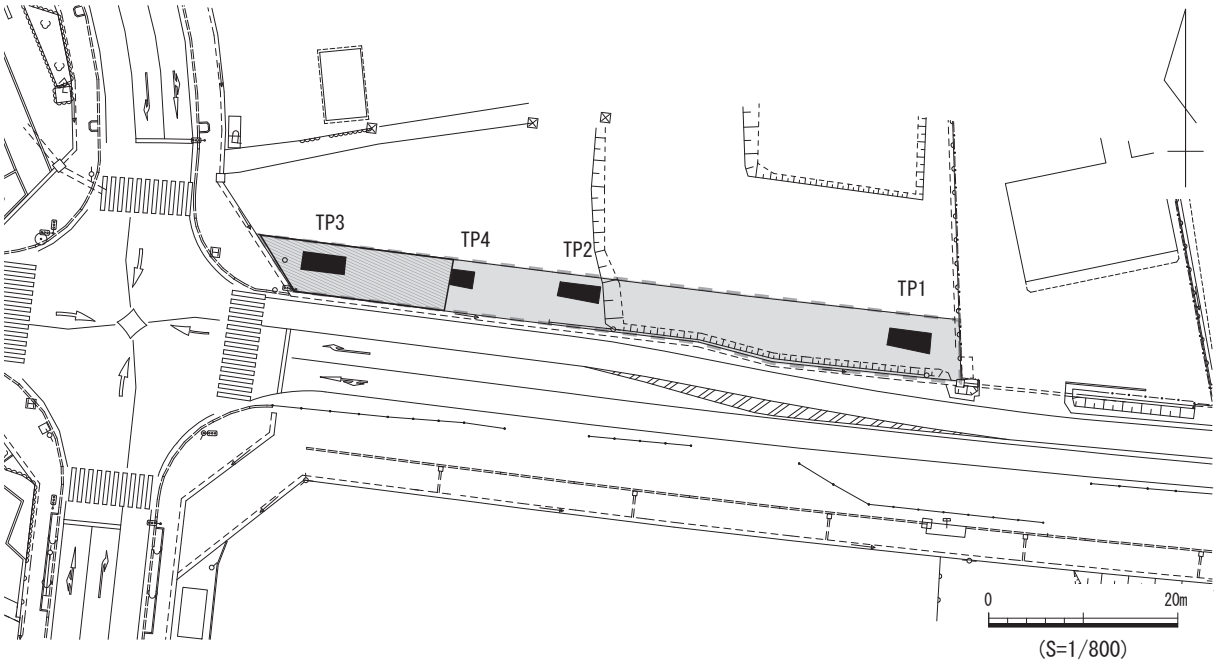


図１　大屋敷遺跡位置図

（平成 31 年度国土地理院発行の２万５千分１電子地形図「岩佐」「美濃」を使用したものである）



※破線は道路拡幅工事対象範囲を示す。

図２　試掘坑と発掘調査区の位置

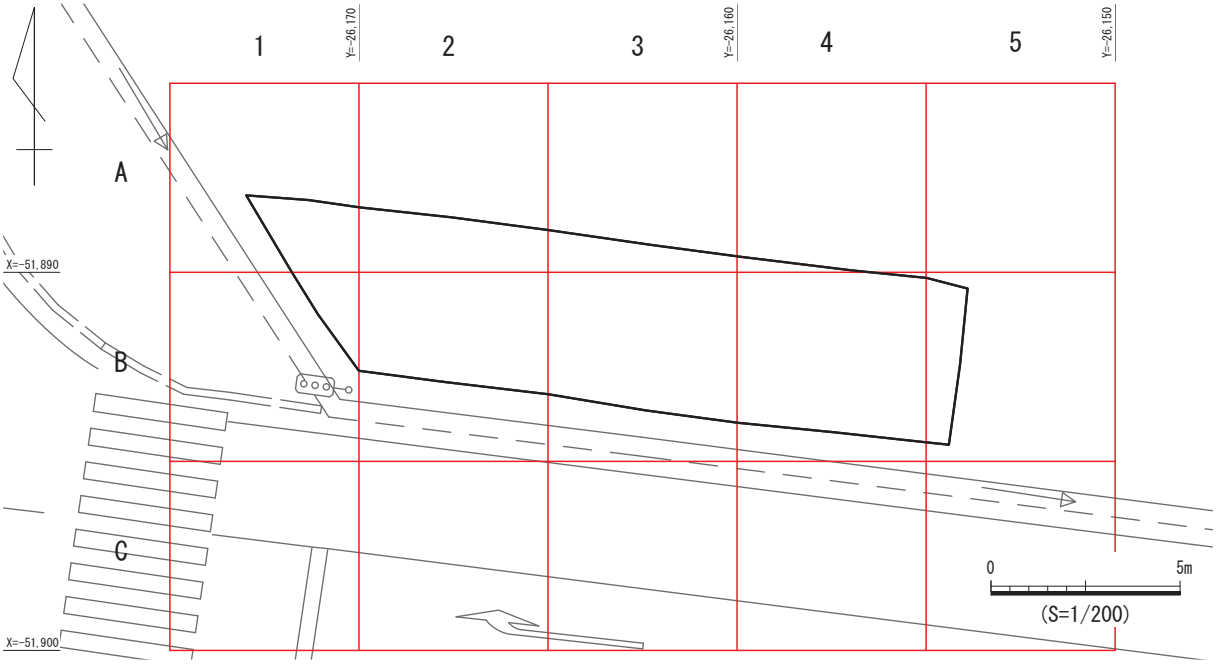


図３　地区割り図

土遺物は、残存状況がよいものについて原位置をデジタル測量により記録した。

写真撮影は、デジタル一眼レフカメラ（APS-C サイズイメージセンサー、2000 万画素）及びコンパクトデジタルカメラを使用した。発掘区全体の景観写真撮影は、脚立を用いて実施した。

２　調査の経過

第１週　（５月８日～10 日）　８日、Ⅰ層（表土）の重機掘削開始。発掘区東部は遺物包含層の残りがよく、基盤層が南東に向かって下がることを確認。９日に重機掘削完了。10 日に人力掘削作業を開始。土層を観察する目的で北壁及び東壁に沿ってトレンチを掘削。

第２週　（５月 13 日～17 日）　13 日、発掘区西側から順に遺物包含層掘削を開始。14 日、遺物包含層掘削を終えたグリッドから遺構検出作業開始。平成 29 年度の試掘・確認調査で検出した掘り込みは、SD01 の一部であることが判明。SK16 北壁の観察で確認。15 日、森島一貴氏（関市教育委員会）来跡。16 日、SD１と重複する撹乱の掘削開始。17 日、試掘坑（TP３）底面を精査し、SD01 を検出。また、北壁で SD01 を確認し、Ａ３グリッドで北へ方向を変えることが判明。

第３週　（５月 20 日～24 日）　20 日、Ｂ４グリッド中央の撹乱から石鏃（16）出土。Ｂ５グリッドの遺物包含層掘削作業中に、S16 から縄文土器片が出土。SK10・SK13 の半割終了、それぞれの土層断面で SK11・SK14 を検出。22 日、県道 94 号線の交通規制のため作業休止。23 日、SD02 及び SK15 と重複する撹乱を掘削、三島美奈子氏、石井里英氏（美濃市教育委員会）来跡。

第４週　（５月 27 日～31 日）　27 日、SK16 の掘削を開始。28 日、雨天のため作業休止。29 日、SK16 から縄文土器片が出土、SK16 の埋土２層で花粉及びプラント・オパール分析を実施するための土壌試料を採取。30 日、林伸明氏他１名（関市教育委員会）来跡、作業員作業終了。31 日、発掘区全景写真撮影。

出土遺物の洗浄や注記等の一次整理作業や、遺物実測や挿図作成等の整理等作業は同年度にセンタ

ーにおいて実施した。

３　発掘作業及び整理等作業の体制

発掘調査及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長　　小林　法良
総務課長　　加藤　武裕
調査課長　　春日井　恒
調査担当係長　　長谷川　幸志
調査担当職員　　辻田　真穂

写真１　発掘作業風景

写真２　SK16 出土縄文土器の取上げ作業

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境[1)]

美濃市は、岐阜県の中央部に位置し、昭和29（1954）年に武儀郡美濃町、洲原村、下牧村、上牧村、大矢田村、藍見村、中有知村の１町６村が合併して成立した。市域の約80％を山林が占め、市の北西部には山岳地帯が広がる。市の南部では、北から貫流する長良川とその中央で西から合流する板取川によって解析された沖積層が形成され、美濃平野に連なる平地が広がる。当遺跡が所在する大矢田地区は、美濃市の南西端に位置し、山間盆地が広がる地域である。

美濃市の地質基盤を構成する美濃帯と呼ばれる地質構造区分は、主にチャート・砂岩・泥岩等からなる。大矢田地区に広がる平坦地には、第四紀層が古生層を覆うようにして分布することが知られているが、この第四紀層は、長良川によって形成された３段の河岸段丘からなる砂礫台地[2)]を構成している。この３段の河岸段丘のうち、大矢田地区は最も低位の段丘にあたる（図４）。

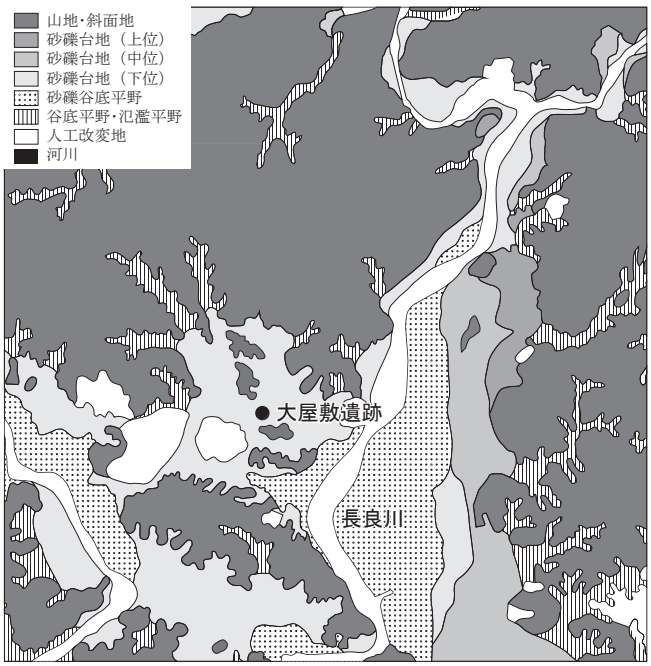


図４　遺跡周辺の地形（S=1/100,000）

（岐阜県企画部地域振興課1993『岐阜県土地分類基本調査「美濃」』を再トレースしたものである）

大矢田地区は、北部に標高500mを超えるチャートからなる誕生山と天王山が、西部から南部にかけて権現山がひかえ、山々に囲まれた地区でもある。また、誕生山及び天王山より発する長良川支流の小河川である、渡来川、宮川、矢田川によって開析された小規模な河岸段丘が随所にみられる。当遺跡は大矢田地区の東端に所在し、遺跡の南側を東流する渡来川によって開析された河岸段丘面上に立地する。本発掘区の中央付近の標高は71.6mで、南東に向かって緩やかに傾斜する。

当遺跡の南約230mの渡来川が屈曲する左岸には、かつて標高90mほどの独立小丘陵（通称南山）があり、その丘陵周辺には美濃市では確認例が少ない縄文時代草創期後半の石器製作址や水場遺構が見つかった渡来川北遺跡などが所在する。

注

１）記述にあたっては以下の文献を参考とした。

美濃市1979『美濃市史』通史編上巻

岐阜県1981『岐阜県地質鉱産図概説』

２）岐阜県企画部地域振興課1993『岐阜県土地分類基本調査「美濃」』

第２節　歴史的環境[1)]

大屋敷遺跡の周辺の遺跡を図５及び表１に示し、特に発掘調査が実施されている遺跡について、以下に時代順に概観する[2)]。なお、文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、図５及び表１と一致する。

旧石器時代　丸山古窯跡群（89）では、昭和 51 年の史跡公園化工事に伴い丘陵の西北部に駐車場を新設した際、スクレイパー１点が採取された。また、渡来川北遺跡（２）は、平成８年に美濃市教育委員会（以下、「美濃市教委」という。）により一部調査が実施され、旧石器時代に属する遺物が確認された。

縄文時代　渡来川北遺跡、垣内遺跡（21）、茶屋下遺跡（22）、一本杉遺跡（23）で当該期の遺構が確認された。渡来川北遺跡は、平成 12 年度から平成 14 年度にかけて、美濃市教委により発掘調査が実施され、草創期後半の石器製作跡や水場遺構、早期の焼礫集石遺構が確認された。水場遺構としては国内最古の事例とされる。垣内遺跡は、平成 14 年度に美濃市教委によって発掘調査が実施された。石器等を伴う小規模の土坑が検出され、当遺跡と遺構の様相が類似する。茶屋下遺跡及び一本杉遺跡は平成 14 年度にセンターが発掘調査を実施し、茶屋下遺跡では中期の石器埋納遺構を、一本杉遺跡では石器を含む前期から中期にかけての遺物包含層を検出した。

弥生時代　井守山遺跡、古村遺跡（12）、石橋遺跡（26）等がある。古村遺跡は、平成５年度から平成６年度にかけて美濃市教委により調査が実施され、後期末から古墳時代初頭の方形周溝墓 18 基、竪穴建物 11 軒などが検出された。方形周溝墓からはパレス壺等の土器が多数出土しており、中濃地域における土器編年の基準資料となっている。石橋遺跡は、平成 10 年度に美濃市教委が試掘調査を実施した際、後期末の竪穴建物２軒を検出、さらに長良川の旧河川跡の堆積から後期末の土器片が出土し、古村遺跡と同時期の集落が展開していた可能性が高い。南山東斜面に位置する碁盤洞遺跡や、北斜面に位置する渡来川北遺跡では、中～後期の土器を伴う竪穴建物が確認されており、急斜面地を利用した集落跡が形成されている。

古墳時代　美濃市内で確認される古墳は、長良川の板取川との合流地点以南に集中し、後期に属する円墳が多いが、美濃観音寺山古墳（71）などわずかに初頭の古墳も存在する。美濃観音寺山古墳は、長良川右岸の標高 155mの観音寺山山頂に築かれた前方後方墳（墳丘墓）で、平成４年度に美濃市教委によって発掘調査が実施された。埋葬主体部には墓壙内に組合せ式木棺が置かれており、被葬者の頭部を挟むように方格規矩四神鏡と重圏文鏡が配置されていた。また、主体部からは玉類等も出土した。殿岡古墳群（77）は、東山と称される独立小丘陵の南麓に築かれた５基の古墳からなり、このうち殿岡１号古墳は、有志により平成８年に石室、平成 10 年に墳丘の実測が行われた。その結果、一辺 24mの方墳で、横穴式石室は美濃市内で最大規模であることが判明した。当該期の集落跡としては、南山遺跡（４）、段遺跡（６）で竪穴建物が確認されている。南山遺跡は、平成５年度に市教委によって発掘調査が実施され、中濃地域では初めてＳ字状口縁台付甕を伴う古墳時代初頭の竪穴建物が確認された。

古代　当遺跡の西方、美濃市の南西端にあたる平地には独立丘陵が点在し、周囲では良質な粘土及び燃料となる赤松を得ることができることから、丸山古窯跡群、大洞窯跡（90）、桜洞古窯跡群（91）、松毛窯跡（92）といった須恵器窯・灰釉陶器窯が集中している。標高 22mの小山に立地する丸山古窯跡群は、昭和 32 年に名古屋大学考古学研究室によって発掘調査が行われた。６世紀後半頃から機能し始めた４基の須恵器窯からなり、古代には関市弥勒寺の瓦を併焼したことでも知られている。当該期の集落跡としては長良川左岸の重竹遺跡（５）や観音堂遺跡（42）等がある。重竹遺跡は、長良川左岸の段丘上に約 3.6㎢展開す

表１　周辺遺跡一覧（１）

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	大屋敷遺跡	縄文・中世・近世	散布地	21	垣内遺跡	縄文・古代(奈・平)	散布地
2	渡来川北遺跡	旧石器・縄文・古墳	集落跡	22	茶屋下遺跡	縄文・古代(奈・平)・中世	散布地
3	碁盤洞遺跡	縄文～古墳・古代(白)・中世(鎌・室・安)	集落跡	23	一本杉遺跡	縄文・古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地
4	南山遺跡	縄文・古墳・中世	集落跡	24	猫洞遺跡	弥生・中世・近世	散布地
5	重竹遺跡	縄文・弥生・古墳・古代(奈・平)・中世・近世	集落跡・その他の墓	25	雉射田遺跡	弥生・中世・近世	散布地
6	段遺跡	縄文・古墳・中世	集落跡	26	石橋遺跡	弥生・古墳・中世(鎌・室・安)	散布地
7	岡ノ下遺跡	古墳	集落跡	27	市場西屋敷遺跡	古墳・中世(鎌・室・安)・近世	散布地
8	南出遺跡	古代(奈・平)・中世(鎌・室・安)	集落跡	28	丸山北遺跡	古墳・古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地
9	上巾上遺跡	古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世	集落跡	29	立長遺跡	古墳・中世(鎌・室・安)・近世	散布地
10	寺屋敷遺跡	中世(鎌・室・安)	集落跡	30	玄入遺跡	古墳・古代(白)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地
11	中屋敷遺跡	中世(鎌・室・安)	集落跡	31	改田遺跡	古墳・古代(奈)・中世	散布地
12	古村遺跡	弥生・古墳・中世(室・安)・近世	集落跡	32	山後遺跡	古墳	散布地
13	金屋街道遺跡	中世(室)	集落跡	33	薬師前遺跡	古墳・中世・近世	散布地
14	大門東遺跡	縄文・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	34	寺後遺跡	古墳・中世(鎌・室・安)・近世	散布地
15	西洞伊瀬遺跡	縄文・古代(平)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	35	岩下遺跡	古墳・中世(鎌・室・安)・近世	散布地
16	高橋北遺跡	縄文・古墳・古代(白)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	36	西屋敷遺跡	古墳・中世(鎌・室・安)	散布地
17	北高田遺跡	縄文・中世(鎌・室・安)	散布地	37	奥屋敷遺跡	古墳・中世(鎌・室・安)・近世	散布地
18	丸山南遺跡	縄文・古墳・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	38	上条遺跡	古墳・古代(平)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地
19	井守山遺跡	縄文～古代(白)・中世(鎌・室・安)	散布地	39	古町遺跡	古墳・中世	散布地
20	樋口遺跡	縄文・古墳・古代(奈)・中世(鎌・室・安)	散布地	40	乾遺跡	古墳・古代(白)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地

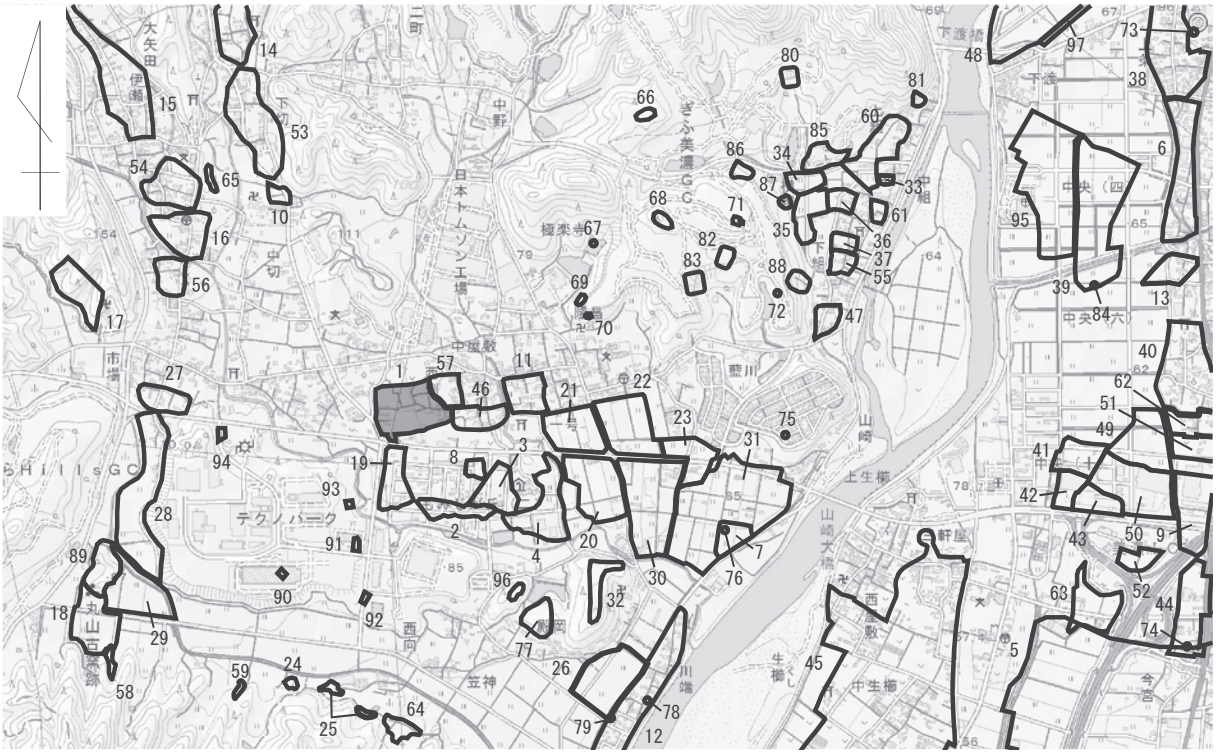


図５　周辺の地図（S=1/25,000）

（平成31年度国土地理院発行の２万５千分１電子地形図「岩佐」「美濃」を使用したものである）

表２　周辺遺跡一覧（２）

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
41	明戸遺跡	古墳・古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	70	大石洞古墳	古墳	古墳
42	観音堂遺跡	古墳・古代(白)・中世(鎌・室・安)	散布地	71	美濃観音寺山古墳	古墳	古墳
43	古屋敷遺跡	古墳・古代(白)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	72	徳祥寺古墳	古墳	古墳
44	下巾上遺跡	古墳・中世・近世	散布地	73	上条小山古墳	古墳	古墳
45	生櫛遺物散布地	古墳・古代(白)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	74	下巾上古墳	古墳	古墳
46	西側遺跡	古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	75	藍川古墳	古墳	古墳
47	祖端屋敷遺跡	古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	76	道光寺塚古墳	古墳	古墳
48	沖ヶ島遺跡	古代(奈・平)	散布地	77	殿岡古墳群	古墳	古墳
49	松森寺下遺跡	古代(奈・平)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	78	黄金塚古墳	古墳	古墳
50	上竹下遺跡	古代(奈)・中世・近世	散布地	79	古村古墳	古墳	古墳
51	善応寺遺跡	古代(奈)・中世(鎌・室・安)	散布地	80	長福寺遺跡	中世	社寺跡
52	下竹下遺跡	古代(奈)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	81	清願寺跡	中世(鎌・室・安)	社寺跡
53	羽瀬倉遺跡	古代(平)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	82	東観音寺遺跡	中世(鎌・室・安)	社寺跡
54	観音前遺跡	古代(平)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	83	西観音寺遺跡	中世	社寺跡
55	七右衛門屋敷遺跡	古代(平)・中世(鎌・室・安)・近世	散布地	84	保寧寺跡	中世(室)	社寺跡
56	中切道西遺跡	中世(鎌・室・安)・近世	散布地	85	健良寺跡	近世	社寺跡
57	西出遺跡	中世(鎌・室・安)・近世	散布地	86	宝珠堂跡	近世	社寺跡
58	柳洞遺跡	中世・近世	散布地	87	明光院跡	近世	社寺跡
59	大根洞遺跡	中世・近世	散布地	88	徳祥寺跡	近世	社寺跡
60	外堂屋敷	中世(鎌・室・安)・近世	散布地	89	丸山古窯跡群	古代(白・奈)	生産遺跡
61	紋十郎屋敷遺跡	中世(鎌・室・安)・近世	散布地	90	大洞窯跡	古代(平)	生産遺跡
62	水戸遺跡	中世(鎌・室・安)	散布地	91	桜洞古窯跡群	古代(平)	生産遺跡
63	池田遺跡	中世(鎌・室・安)・近世	散布地	92	松毛窯跡	古代(平)	生産遺跡
64	栃洞遺跡	近代	散布地	93	亀蔵庵窯跡	近世	生産遺跡
65	喪山古墳	古墳	古墳	94	権蔵窯跡	近世	生産遺跡
66	日室古墳	古墳	古墳	95	古城跡城下町遺跡	中世(室)	城館跡・集落跡
67	平曽洞１号古墳	古墳	古墳	96	西向遺跡	中世(鎌・室・安)	その他の墓
68	平曽洞２号古墳	古墳	古墳	97	百間堤跡	近世	その他の遺跡
69	平曽洞古墳群	古墳	古墳				

※時代の呼称は、飛鳥を「飛」、白鳳を「白」、奈良を「奈」、平安を「平」、鎌倉を「鎌」、室町を「室」、安土桃山を「安」とした。

る縄文時代から中世にかけての集落跡で、昭和 53～56 年度に関市教育委員会（以下、「関市教委」とする。）によって行われた発掘調査、平成 13 年度にセンターが実施した発掘調査で、奈良時代から平安時代にかけての竪穴建物や奈良時代の火葬墓等が確認された。観音堂遺跡と周辺の明戸遺跡（41）、古屋敷遺跡（43）、上竹下遺跡（50）では、平成 15 年度から平成 21 年度にかけて美濃市教委により発掘調査が実施された。古墳時代末から古代にかけての竪穴建物が 136 軒確認され、この４つの遺跡が同一の集落を形成していたことが明らかとなった。

中・近世　当遺跡の北東に位置する観音寺山及びその北側の丘陵地には、東観音寺遺跡（82）、長福寺遺跡（80）、清願寺跡（81）等の中近世の社寺跡や中世墳墓群が集中する。東観音寺遺跡は、平成４年度に美濃市教委によって発掘調査が実施され、室町時代の寺院基壇が確認された。清願寺跡は、平成 17 年度にセン

ターが発掘調査を行い、近世の仏堂跡の可能性がある小規模な礎石建物跡を確認した。当該期の集落跡としては、下巾上遺跡（44）や重竹遺跡で確認されている。下巾上遺跡は、平成６年度にセンターが発掘調査を実施し、掘立柱建物や集石墓等を検出した。重竹遺跡では、昭和 56～57 年度に関市教委が行った発掘調査で、15～16 世紀の鍛冶屋敷跡が確認された。さらに平成 13 年度にセンターが実施した発掘調査でも、15～17 世紀の鍛冶関連遺構や屋敷跡、屋敷地を区画する堀等を確認した。このほか、先に述べた大洞窯跡等が所在する丘陵上には、江戸時代末から明治時代初期に操業した陶磁器窯の亀蔵庵窯跡（93）や権蔵窯跡（94）が立地する。

注

１）当節の執筆について以下の参考文献を使用した。

伊藤聡・牛丸岳彦・清山健・田中弘志・成瀬正勝 1999「美濃市殿岡古墳群の研究１－１号墳の石室実測報告―」『美濃の考古学』第３号、美濃の考古学刊行会 68－73 頁

岐阜県 1972『岐阜県史』（通史編原始）

岐阜県 2003『岐阜県史』（考古資料）

財団法人岐阜県文化財保護センター1995『下巾上遺跡』

財団法人岐阜県教育文化財団 2005『重竹遺跡・上西田遺跡』

清山健・田中弘志・成瀬正勝 2000「美濃市殿岡古墳群の研究２－１号墳の墳丘測量報告―」『美濃の考古学』第４号、美濃の考古学刊行会 72-77 頁

関市教育委員会「重竹遺跡　調査総括」『関市市内遺跡発掘調査報告書　平成 21 年度』、７-９頁

美濃市 1979『美濃市史』（通史編上巻）

美濃市教育委員会 1989『美濃市西南部古窯址群』

美濃市教育委員会 1997『南山遺跡』

美濃市教育委員会 1999『美濃市遺跡分布地図』

美濃市教育委員会 2002『垣内遺跡』

美濃市教育委員会 2004『渡来川北遺跡　縄文時代草創期の調査』

美濃市教育委員会 2008『渡来川北遺跡』

美濃市教育委員会 2012『美濃観音寺山古墳・長福寺遺跡・西観音寺遺跡・東観音寺遺跡』

美濃市教育委員会 2014『観音堂遺跡他』

美濃市郷土史編纂委員会 1964『美濃市の歴史』、美濃市小中学校校長会

２）表１の遺跡名、種別、時代と図５の遺跡位置及び範囲は、岐阜県教育委員会 2007『改訂版　岐阜県　遺跡地図』を参考とした。また、その後の改訂については、岐阜県生活環境部県民文化局文化伝承課に確認した。なお、美濃観音寺山古墳（71）、長福寺遺跡（80）、東観音寺遺跡（82）、西観音寺遺跡（83）の遺跡名は美濃市教育委員会 2012 に合わせた。

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

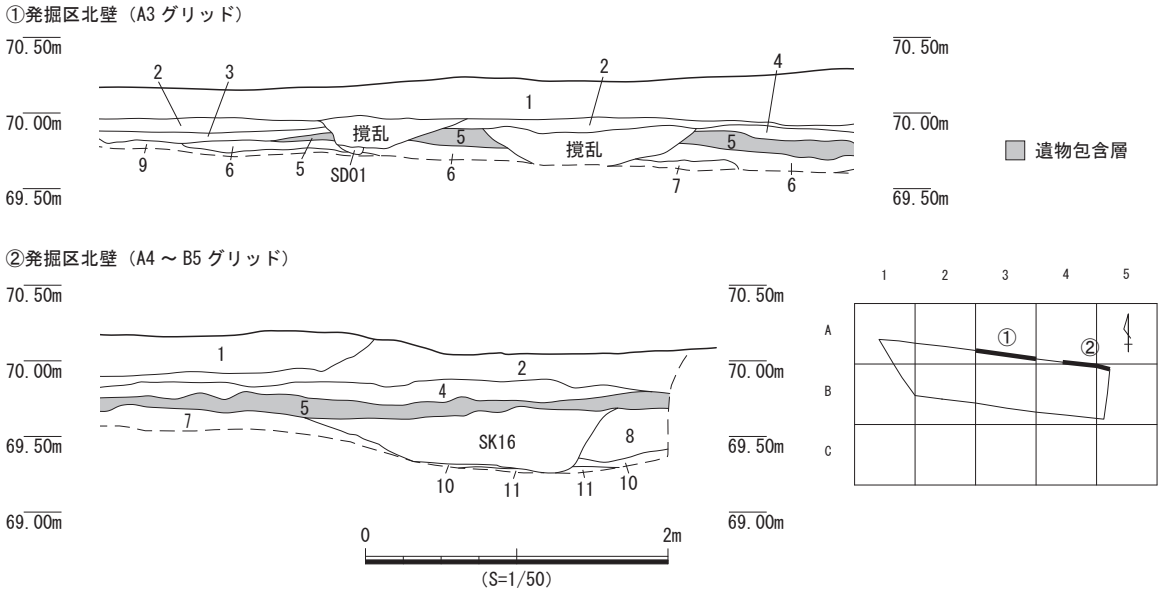
当遺跡の現況は荒蕪地である。平成 29 年度に県文化伝承課が実施した試掘・確認調査の結果と本発掘調査における成果を基に、基本層序を以下のとおり設定した（図６）。なお、発掘区の現況及び旧地形は西から東に向かって緩やかに低くなる。

Ⅰ層　表土　造成土（Ⅰａ層、１～３層）と、造成前の表土（Ⅰｂ層、４層）に分けられる。Ⅰａ層は、客土であり、礫及び砂が混ざる。層厚は約 0.35ｍで、発掘区全域に堆積する。Ⅰｂ層は、Ⅰａ層に比べて礫の混ざりが少なく、山茶碗や中近世陶磁器が出土した。層厚は約 0.15ｍである。発掘区の中央以東で確認でき、発掘区西側はⅠａ層の造成に伴う削平により遺存しない。

Ⅱ層　遺物包含層　旧表土である（５層）。数は少ないが、古代以前の遺物を含む。層厚は 0.04～0.13ｍで、発掘区の中央以東で確認した。発掘区西部は、Ⅰａ層の造成に伴う削平により遺存しない。

Ⅲ層　基盤層　旧地形を形成する堆積である。土色と土質の違いから３層に分けられる。Ⅲa 層（６～８層）は、礫が少量混入する粘質土である。層厚は 0.1～0.33ｍで、地形が低くなる発掘区の東部に堆積する。Ⅲb 層（９～10 層）は、Ⅲa 層よりもさらにしまりがあり、発掘区のほぼ全域で確認した。Ⅲc 層（11 層）は、しまりのない礫層で、発掘区の東部で確認した。

遺構検出面は、Ⅱ層が確認できない発掘区西側ではⅠ層基底面、その他はⅢ層上面とした。



1　10YR3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性なし　亜円　亜角礫を2%含む　表土(造成土)　Ⅰa層
2　7.5Y5/1　灰色砂礫土　しまりなし　粘性なし　表土(造成土)　Ⅰa層
3　10YR4/2　灰黄褐色土　しまりややあり　粘性なし　径5cm程の礫を2%含む　表土(造成土)　Ⅰa層
4　10YR3/4　暗褐色土　しまりあり　粘性ややあり　径0.5～1cmの砂岩亜角礫を1%　黄褐色粒を2%含む　造成前表土　5層と層界が混ざる　Ⅰb層
5　10YR2/2　黒褐色粘質土　しまりあり　粘性ややあり　径3mmの砂岩亜角礫を1%　黄褐色粒を2%含む　遺物包含層　7層と層界が混ざる　Ⅱ層
6　10YR5/2　灰黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　径4mmの砂岩亜角礫を1%　黄褐色粒を2%含む　基盤層　Ⅲa層
7　10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土　しまりあり　粘性あり　径1～2mm砂岩亜円礫を1%含む　基盤層　Ⅲa層
8　10Y5/4　にぶい黄褐色粘質土　しまりあり　粘性あり　黄褐色粒を3%　黒褐色土ブロックを20%含む　基盤層　Ⅲa層
9　2.5Y5/6　黄褐色粘質土　しまりあり　粘性あり　基盤層　Ⅲb層
10　2.5Y5/4　黄褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　基盤層　Ⅲb層
11　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色土　しまりなし　粘性ややあり　径2～3cmの砂岩・チャート亜角礫を25%含む　基盤層　Ⅲc層

図６　発掘区北壁土層断面図

第２節　遺構・遺物の概要

１　遺構の概要

（１）　概要

今回の調査では、17 基の土坑と２条の溝を検出した。このうち、遺物を伴う遺構は土坑２基（SK05・SK16）であった。本書では、本調査で検出したすべての遺構を挿図に掲載した。検出した遺構の種類、遺構記号（括弧内）、分類内容は以下のとおりである。

溝状遺構（SD） 長軸が短軸の３倍以上を有する、細長く掘り込まれた遺構。

土坑（SK） 上記以外で、人為的に掘り窪められた穴のうち、性格不明なもの。

なお、本書掲載時の遺構番号は、原則として発掘区の西側から順に番号を付した。遺構が重複する場合は、新旧関係が古いものから順に番号を付した。

（２）遺構一覧表

遺構の位置や規模について、遺構種別及び時期ごとに一覧表で示した。遺構一覧表の各項目内容は次のとおりである。

位置　遺構を検出した位置を示し、複数の地区にまたがる場合は「～」で結んだ。

検出面　基本層序（本章第１節）で示した記載をもとに、略号で示した。Ⅰ層基底面で検出した遺構の場合「Ⅰ基」、Ⅲa 層上面で検出した遺構の場合「Ⅲ上」と表記した。

平面形・堆積・断面形　図７のとおり分類した。

規模　（　）で示した数値は、残存値を示す。

重複関係　重複した遺構について、その遺構より新しい遺構の番号を「新」、古い遺構の番号を「旧」に記載した。

出土遺物　遺構内から出土した遺物には、縄文土器と石製品がある。縄文土器を J、石製品を S の略号で示し、破片数と併せて記載した。

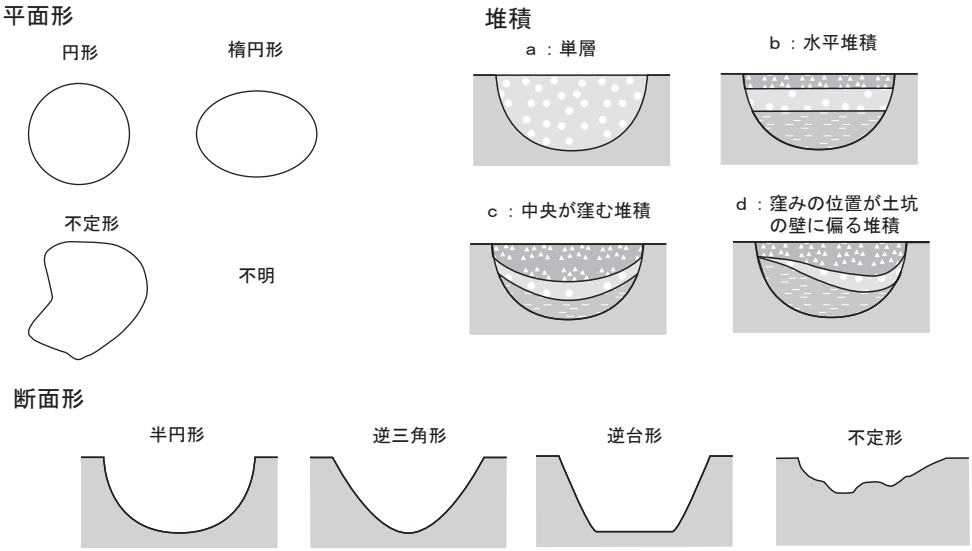


図７　土坑分類模式図

２　遺物の概要

（１）概要

今回の調査で出土した遺物は 90 点である。土器類では、縄文土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、中世陶磁器（青磁、大窯製品）、近世・近代陶磁器がある[1)]。その他、石器・石製品が出土した。数量の内訳は表３のとおりである。

本書では、遺構から出土した遺物のうち、図化可能なものは全て報告した。また、遺構以外から出土した遺物についても、おおよその時期がわかるものについては、すべて本書に掲載した。

表３　遺物点数

	土器類							石器類		合計
	縄文土器	土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	中世陶磁器	近世・近代陶磁器	石器類	石製品	
接合前破片数(a)	54	1	2	1	15	3	9	2	3	90
接合後破片数(b)	31	1	2	1	14	3	8	2	3	65
(b)の全体に対する割合(%)	47.7	1.6	3.1	1.6	21.6	4.7	12.4	3.1	4.7	−
接合比率(%)（100－ｂ/a)	42.5	0	0	0	6.6	0	11.1	0	0	−
本書掲載数	8	0	2	1	2	2	0	1	3	19

※接合前破片数は、土器類は破片数、石器類は取り上げ点数を示す。

（２）遺物観察表

本書に掲載した遺物について、種別毎に観察表を作成し、遺物番号順に記載した。各項目の内容は、次のとおりである。

出土位置　グリッド及び遺構番号、出土層位を記載した。出土層位は、表土及び遺物包含層出土の場合は基本層序番号（Ⅰ・Ⅱ）を付した。遺構出土の場合は、遺構埋土分層前に取り上げたものには、深さ５cm 毎、上から順に「a・b・c」と設定した人工層位番号を付した。分層後は、土層番号を付した。なお、撹乱埋土出土や所属層位が不明確なものには「-」を、表採したものには「表採」と記入した。

大きさ　（　）で示した数値は、土器類観察表では復元値、石器・石製品観察表では残存値を示す。

口縁部残存率[2)]　口縁部が残存する破片について、計測を実施した数値を記載した。しかし、いずれも１/12 以下の残存率であったため、「１」と記載した。

胎土・色調　胎土中の含有物は肉眼観察で判断した。色調は、『新版標準土色帳』（小山・竹原 2004）を基に肉眼観察で判断し、見本に近い色調の JIS notation 番号を記載した。

石材・素材　石器類の材質は肉眼観察で判断した。石材の観察には倍率 10 倍のルーペを使用した。

注

１）各遺物の器種分類や所属時期は、主に以下の文献を参照し、判断した。

小林達雄編 2008『総覧　縄文土器』、株式会社アムプロモーション

渡辺博人 2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会 2008 年愛知大会研究発表資料集』

藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第３号、三重県埋蔵文化財センター

藤澤良祐 2005「施釉陶器生産技術の伝播」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集、全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

山本信夫 1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』、真陽社

２）宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集、国立歴史民俗博物館

第３節　遺構・遺物

本調査で検出した遺構は、溝状遺構２条、土坑 17 基である。このうち、遺物を伴った遺構は土坑２基（SK05、SK16）であり、縄文土器や打欠石錘が出土した。

１　溝状遺構

SD01（図８）

検出状況　Ａ１からＡ３グリッドで検出した。検出時の遺構の輪郭は明瞭であった。Ⅰ層基底面で検出したが、発掘区北壁の土層観察で、本遺構がⅢ層上面（C−C’断面５層）の遺構であることを確認した。遺構の中央付近でSK04 と、北側への屈曲部で SK13 及び SK14 と重複し、SK04 より新しく、SK13 及び SK14 より古い。

形状　主軸方位は東西方向であるが北側に湾曲し、Ａ３グリッドで屈曲して北に方向を変える。西端は撹乱と重複するため、発掘区外に延びるか否かは不明である。断面は半円形、深さは 0.08ｍである。Ⅰ層基底面の遺構であるため、南部は上面が削平を受けていると考えられる。

堆積状況　埋土は単層であるが、底部付近の堆積に基盤層土のブロックを含む。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SD02（図８）

検出状況　Ｂ３からＢ５グリッド、Ⅲ層上面で検出した。検出時の遺構の輪郭は非常に不明瞭であったが、乾燥でひびが入る帯状の埋土の範囲を確認し、また、撹乱壁面の土層観察で掘方を確認したことから、溝状の遺構と判断した。発掘区東壁（C−C’断面）では、本遺構と SK16 の重複が確認でき、本遺構が新しい。

形状　主軸方位はN−75°−Wでほぼ直線的で、東部は発掘区外に延びる。断面は皿状である。掘方西部が浅く、東に向かって深くなる。

堆積状況　埋土は単層である。掘方西部では、黒色土のブロックを僅かに含む。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

２　土坑

（１）縄文時代の土坑（図９～11）

SK05

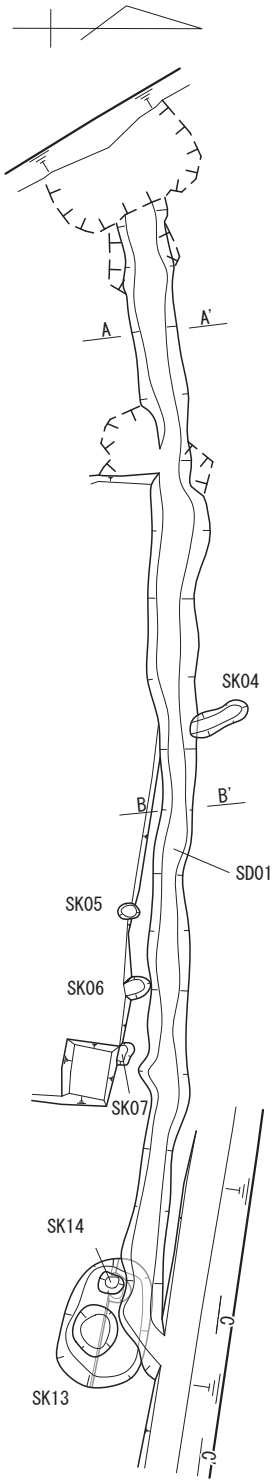
検出状況　Ａ２グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。検出時の遺構の輪郭は不明瞭であった。遺構の南部が試掘坑（TP３）にかかる。

形状　平面形は円形、断面は半円形である。

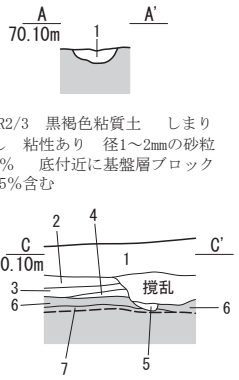
堆積状況　埋土は２層に分層した。中央がやや窪むように堆積する。埋土に黄褐色土のブロックや亜角礫が混入する。

遺物出土状況　埋土の１層中から縄文土器片１点が出土した。

SD01



SD01土層断面

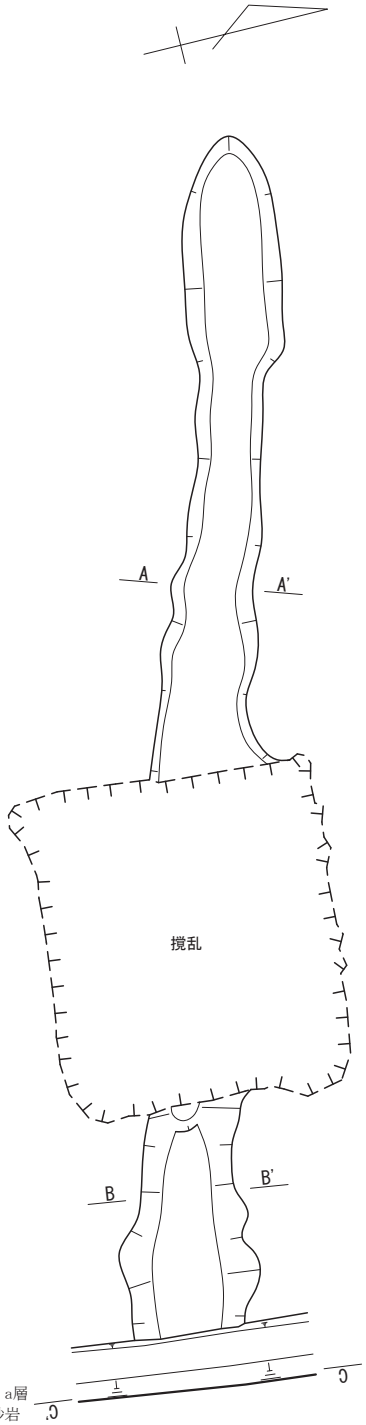


1　10YR2/3　黒褐色粘質土　しまりなし　粘性あり　径1～2mmの砂粒を2%　底付近に基盤層ブロックを15%含む

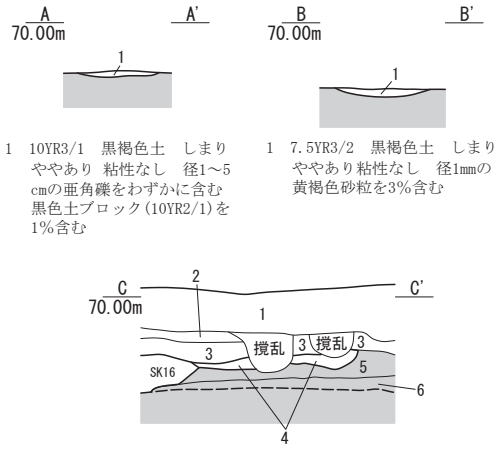
1　10YR2/3　黒褐色粘質土 しまりなし粘性あり径1～2mmの砂粒を2%　底付近に基盤層ブロックを25%含む

1　10YR3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性なし　亜円・亜角礫を2%含む　表土(造成土)　Ⅰa層
2　7.5Y5/1　灰色砂礫土　しまりなし　粘性なし　表土(造成土)　Ⅰa層
3　10YR4/2　灰黄褐色土　しまりややあり　粘性なし　径5cm程の礫を2%含む　表土(造成土)　Ⅰa層
4　10YR2/2　黒褐色粘質土　しまりあり　粘性ややあり　径3mmの砂岩亜角礫を1%　黄褐色粒を2%含む　遺物包含層　6層と層界が混ざる　Ⅱ層
5　10YR2/3　黒褐色粘質土　しまりなし　粘性あり　径1～2mmの砂粒を2%　底付近に基盤層ブロックを10%含む　SD01埋土
6　10YR5/2　灰黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり　径4mmの砂岩亜角礫を1%　黄褐色粒を2%含む　基盤層　Ⅲa層
7　2.5Y5/6　黄褐色粘質土　しまりあり　粘性あり　基盤層　Ⅲb層

SD02



SD02土層断面



1　10YR3/1　黒褐色土　しまりややあり　粘性なし　径1～5cmの亜角礫をわずかに含む　黒色土ブロック(10YR2/1)を1%含む

1　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりややあり粘性なし　径1mmの黄褐色砂粒を3%含む

1　7.5Y5/1　灰色砂礫土　しまりなし　粘性なし　表土(造成土)　Ⅰa層
2　10YR3/4　暗褐色土　しまりあり　粘性ややあり　径0.5～1cmの砂岩亜角礫を1%　黄褐色粒を2%含む　造成前表土　3層と層界が混ざる　Ⅰb層
3　10YR2/2　黒褐色粘質土　しまりあり　粘性ややあり　径3mmの砂岩亜角礫を1%　黄褐色粒を2%含む　遺物包含層　5層と層界が混ざる　Ⅱ層
4　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりややあり　粘性なし　径2～3mmの黄褐色粒を3%含む　SD02埋土
5　10Y5/4　にぶい黄褐色粘質土　しまりあり　粘性あり　黄褐色粒を3%　黒褐色土ブロックを20%含む　基盤層　Ⅲa層
6　2.5Y5/4　黄褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　基盤層　Ⅲb層

0　2m
(S=1/50)

図８　SD01・SD02

出土遺物　細片であるため、実測できなかった。

所属時期　出土した遺物から縄文時代以降と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SK16

検出状況　Ｂ４～Ｂ５グリッド、発掘区の北東隅のⅢ層上面で検出した。発掘区外に広がる。発掘区の北壁及び東壁の土層断面観察時にⅢa 層上面から掘り込まれる掘方を確認したのち、遺構の範囲を平面で検出した。発掘区東壁面で SD02 と重複し、SD02 より古いことを確認した。

形状　発掘区外に広がるため、平面形は不明である。底部及び壁面に起伏があり、北東側が深くなる。断面は、半円形に近い。

堆積状況　埋土は、遺構中央のＡ-Ａ’断面及び東壁面では水平に堆積する２層に分層したが、北壁断面では、窪みの位置が東西両壁面に偏った４層に分層した。全ての土層が径２～６cm 程度の亜角礫及び亜円礫を多く含む。なお、Ａ-Ａ’断面２層の埋土を採取し、花粉分析及びプラント・オパール分析を実施した（第４章）。

遺物出土状況　１層から縄文土器片と打欠石錘が出土した。遺物は、おもに遺構の南部に集中する。埋土１層の上面に近い深さで取り上げたものが多いが、２など遺構南側の掘方壁面に接して出土したものもある。比較的遺存状態の良い破片は、外面を上に向けて出土するものが多く見られた。

遺物　１～８は縄文土器である。１は口縁部、その他は胴部の破片で、１～４は地文に単節斜縄文を施し、６～８は無文である。１は、外面にＬＲ縄文を施した後、半截竹管を用いて口縁直下に直線、体部に弧状の平行沈線文を施す。２は、外面に貼り付けた隆帯上に、隆帯幅よりも細い半截竹管による連続刺突を施す。隆帯貼り付け後にＬＲ縄文を施す。３は、外面上部にＲＬ縄文を施す。４は、外面が「く」の字形に強く屈曲する頸部付近の破片と思われる。外面の屈曲部より下位にＲＬ縄文を施す。５は、外面右下部に縄文の痕跡が確認できるものの、節の単位は不明である。９は打欠石錘である。自然礫の長軸の両端に打ち欠きがあり、打ち欠きの端部はやや摩耗する。礫の凸側には、紐擦れによる帯状痕跡がわずかに残る。

所属時期　出土した土器から、本遺構の所属時期は縄文時代前期～中期と判断した。

（２）所属時期不明土坑（図 12・13）

SK01

検出状況　Ａ１グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。検出時の遺構の輪郭はやや不明瞭であった。西部で SK02 と重複し、本遺構が古い。

形状　平面形は円形である。底部が尖り、断面は逆三角形である。

堆積状況　埋土は３層に分層した。水平に堆積し、埋土中に黒褐色土のブロックを含む。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

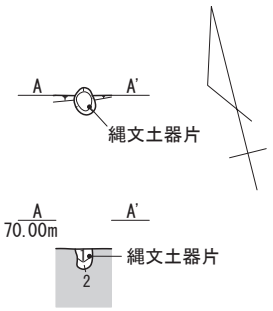
SK02

検出状況　Ａ１グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。検出時の遺構の輪郭はやや不明瞭であった。東部で SK01 と重複し、本遺構が新しい。

形状　平面形は円形である。底部が尖り、断面は逆三角形である。

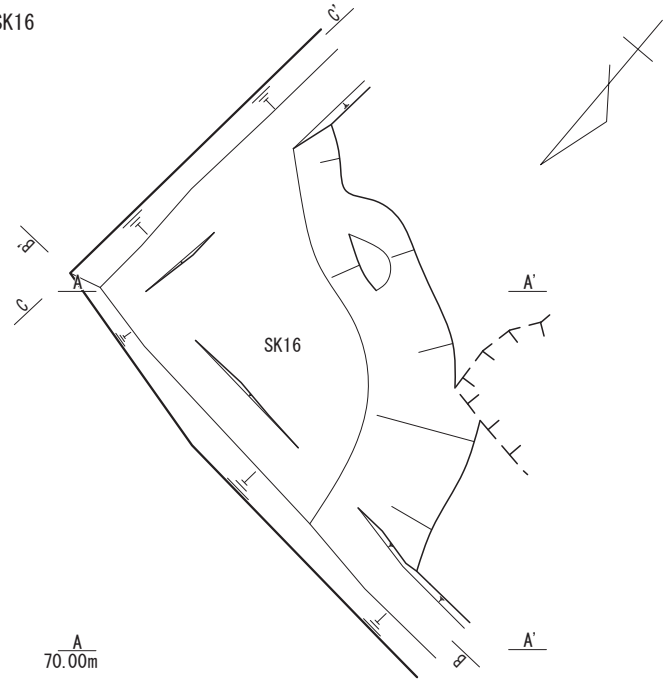
堆積状況　埋土は２層に分層した。東西両壁面に緩やかな起伏がみられるが、この部分で土の堆積に

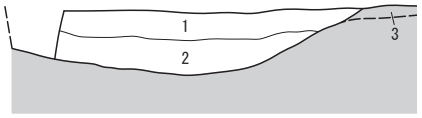
SK05



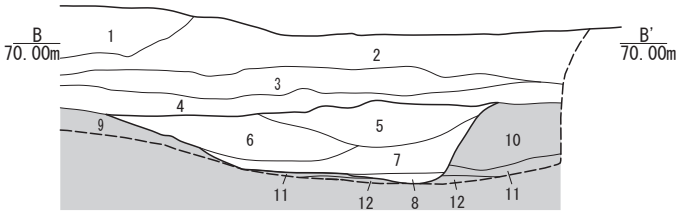
1　10YR2/3　黒褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　黄褐色土ブロックを5%含む
2　10YR4/4　褐色粘質土　しまりややあり　粘性あり　径2cmのチャート亜角礫を1%含む

SK16





1　7.5YR1.7/1　黒色粘質土　しまりなし　粘性あり　径1～6cmの砂岩・チャート亜角・亜円礫を5%含む
2　5YR2/1　黒褐色粘質土　しまりなし　粘性あり　径3～6cmの砂岩・チャート亜角・亜円礫を3%　基盤層ブロックを5%含む
3　10YR3/3　暗褐色粘質土　しまりあり　粘性あり　径1～2mmの砂粒を1%含む　基盤層　Ⅲa層



1　10YR3/1　黒褐色土　しまりなし　粘性なし　亜円　亜角礫を2%含む　表土(造成土)　Ⅰa層
2　7.5Y5/1　灰色砂礫土　しまりなし　粘性なし　表土(造成土)　Ⅰa層
3　10YR3/4　暗褐色土　しまりあり　粘性ややあり　径0.5～1cmの砂岩亜角礫を1%　黄褐色粒を2%含む　造成前表土　4層と層界が混ざる　Ⅰb層
4　10YR2/2　黒褐色粘質土　しまりあり　粘性ややあり　径3mmの砂岩亜角礫を1%　黄褐色粒を2%含む　遺物包含層　Ⅱ層
5　7.5YR2/2　黒褐色粘質土　しまりなし　粘性あり　径1～6cmの砂岩・チャート亜角・亜円礫を3%含む　SK16埋土
6　7.5YR1.7/1　黒色粘質土　しまりなし　粘性あり　径1～6cmの砂岩・チャート亜角・亜円礫を5%含む　SK16埋土
7　5YR2/1　黒褐色粘質土　しまりなし　粘性あり　径3～6cmの砂岩・チャート亜角・亜円礫を3%　基盤層ブロックを5%含む　SK16埋土
8　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　7層ブロックを25%含む　SK16埋土
9　10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土　しまりあり　粘性あり　径1～2mm砂岩亜円礫を1%含む　基盤層　Ⅲa層
10　10Y5/4　にぶい黄褐色粘質土　しまりあり　粘性あり　黄褐色粒を3%　黒褐色土ブロックを20%含む　基盤層　Ⅲa層
11　2.5Y5/4　黄褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　基盤層　Ⅲb層
12　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色土　しまりなし　粘性ややあり　径2～3cmの砂岩・チャート亜角礫を25%含む　基盤層　Ⅲc層

1　7.5Y5/1　灰色砂礫土　しまりなし　粘性なし　表土(造成土)　Ⅰa層
2　10YR3/4　暗褐色土　しまりあり　粘性ややあり　径0.5～1cmの砂岩亜角礫を1%　黄褐色粒を2%含む　造成前表土　3層と層界が混ざる　Ⅰb層
3　10YR2/2　黒褐色粘質土　しまりあり　粘性ややあり　径3mmの砂岩亜角礫を1%　黄褐色粒を2%含む　遺物包含層　Ⅱ層
4　7.5YR1.7/1　黒色粘質土　しまりなし　粘性あり　径1～6cmの砂岩・チャート亜角・亜円礫を5%含む　SK16埋土
5　5YR2/1　黒褐色粘質土　しまりなし　粘性あり　径3～6cmの砂岩・チャート亜角・亜円礫を3%　基盤層ブロックを5%含む　SK16埋土
6　10Y5/4　にぶい黄褐色粘質土　しまりあり　粘性あり　黄褐色粒を3%　黒褐色土ブロックを20%含む　基盤層　Ⅲa層
7　2.5Y5/4　黄褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　基盤層　Ⅲb層
8　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色土　しまりなし　粘性ややあり　径2～3cmの砂岩・チャート亜角礫を25%含む　基盤層　Ⅲc層

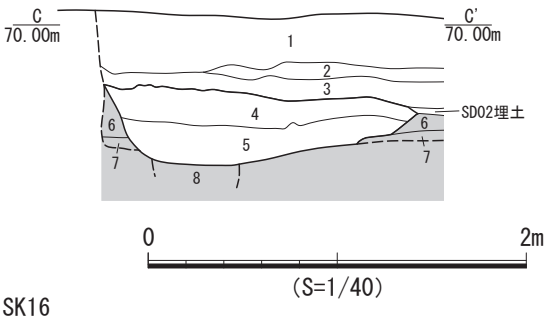


図９　SK05・SK16

変化はない。埋土中に基盤層ブロックを含む。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK03

検出状況　Ａ１グリッド、Ｉ層基底面で検出した。検出時の遺構の輪郭は不明瞭であった。

形状　平面形は、長軸方位がN-68°-Wに傾く楕円形に近い不整な形状である。底面は起伏が激しい。

堆積状況　埋土は３層に分層した。３層は底面のくぼみ部分の埋土で、１・２層はほぼ水平に堆積す

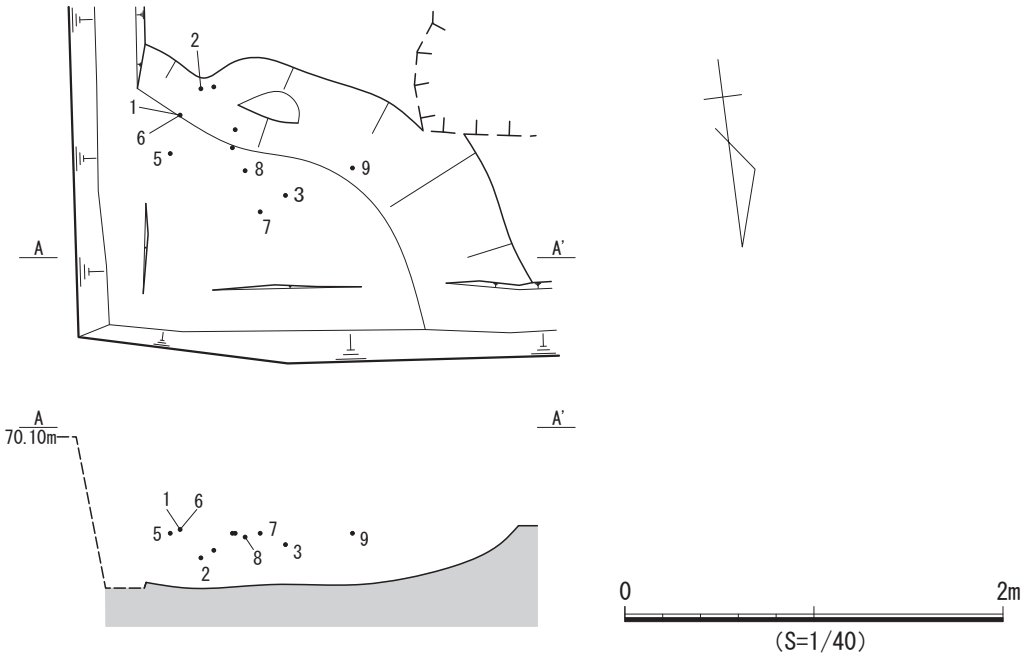


図 10　SK16 遺物出土状況

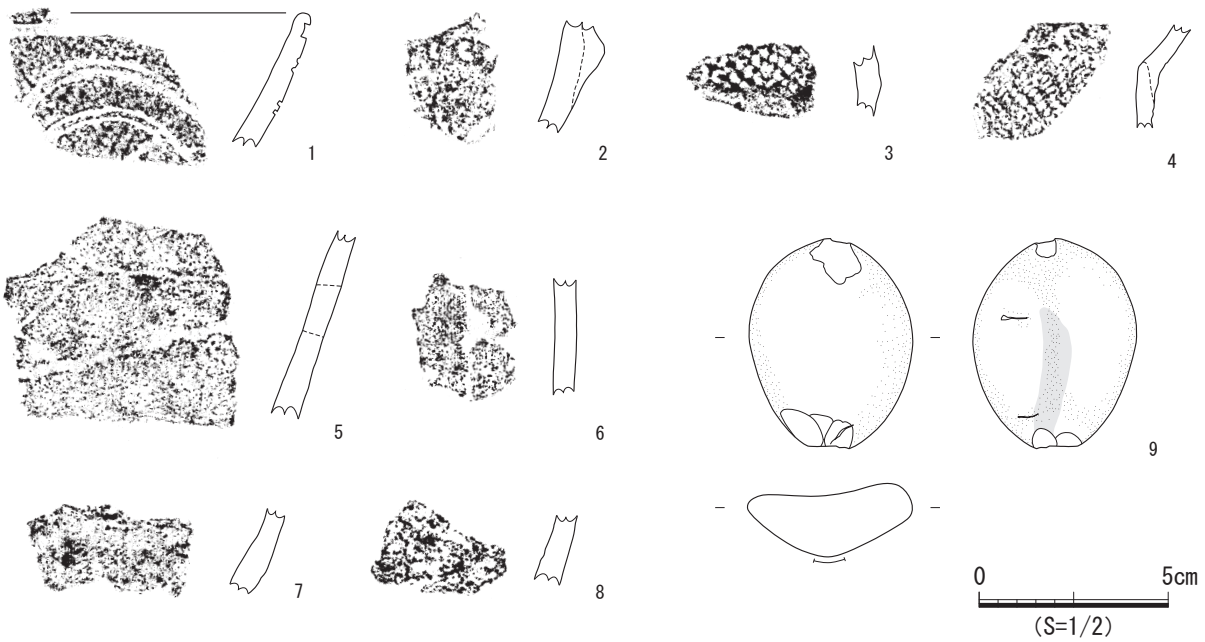


図 11　SK16 出土遺物

る。１・２層には黒褐色土のブロックが混入し、１層は炭化材を含む。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK04

検出状況　Ａ２グリッド、Ｉ層基底面で検出した。検出時の遺構の輪郭は明瞭であった。遺構の南部でSD01と重複し、本遺構が古い。

形状　長軸方位はN-23°-Wで、SD１と重複するため全形は不明である。断面は半円形である。

堆積状況　埋土は単層である。埋土中に黒褐色土のブロックが混入する。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK06

検出状況　Ａ２グリッド、Ｉ層基底面で検出した。検出時の遺構の輪郭は明瞭であった。遺構の南部が試掘坑（TP３）にかかる。

形状　平面形は不明である。断面は逆台形である。

堆積状況　埋土は単層である。埋土全体に基盤層に含まれる黄褐色粒が混入する。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK07

検出状況　Ａ２グリッド、Ｉ層基底面で検出した。検出時の遺構の輪郭は明瞭であった。遺構の南部が試掘坑（TP３）にかかる。

形状　平面形は不明である。断面は逆台形である。

堆積状況　埋土は単層である。埋土に黒褐色土のブロックが混入する。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK08

検出状況　Ｂ２グリッド、Ｉ層基底面で検出した。検出時の遺構の輪郭は不明瞭であった。

形状　平面形は、長軸方位がN-51°-Wに傾く楕円形である。底面には緩やかな起伏があるため、断面は不整な形状である。

堆積状況　埋土は２層に分層でき、水平に堆積する。埋土に黒褐色土のブロックが混入する。

遺物土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK09

検出状況　Ｂ２～３グリッド、Ｉ層基底面で検出した。検出時の遺構の輪郭は不明瞭であったが、土層断面を観察して、掘方の立ち上がりを確認した。

形状　平面は長軸方位がN-82.5°-Wに傾く楕円形である。断面は、逆台形である。

堆積状況　埋土は３層に分層でき、水平に堆積する。掘方壁面に緩やかな起伏をもつが、この部分で土層堆積の変化は確認できなかった。埋土に黒褐色土のブロックや黄褐色粒を含む。

遺物土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK10

検出状況　Ｂ３グリッド、Ⅲ層上面で検出した。検出時の遺構の輪郭は不明瞭であった。遺構の南部でSK11と重複し、本遺構が古い。

形状　遺構の東部が撹乱と重複するため、平面形は不明である。底面北部がやや窪み、断面は不整な形状である。

堆積状況　埋土は２層に分層でき、水平に堆積する。埋土に黒褐色土のブロックを含む。

遺物土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

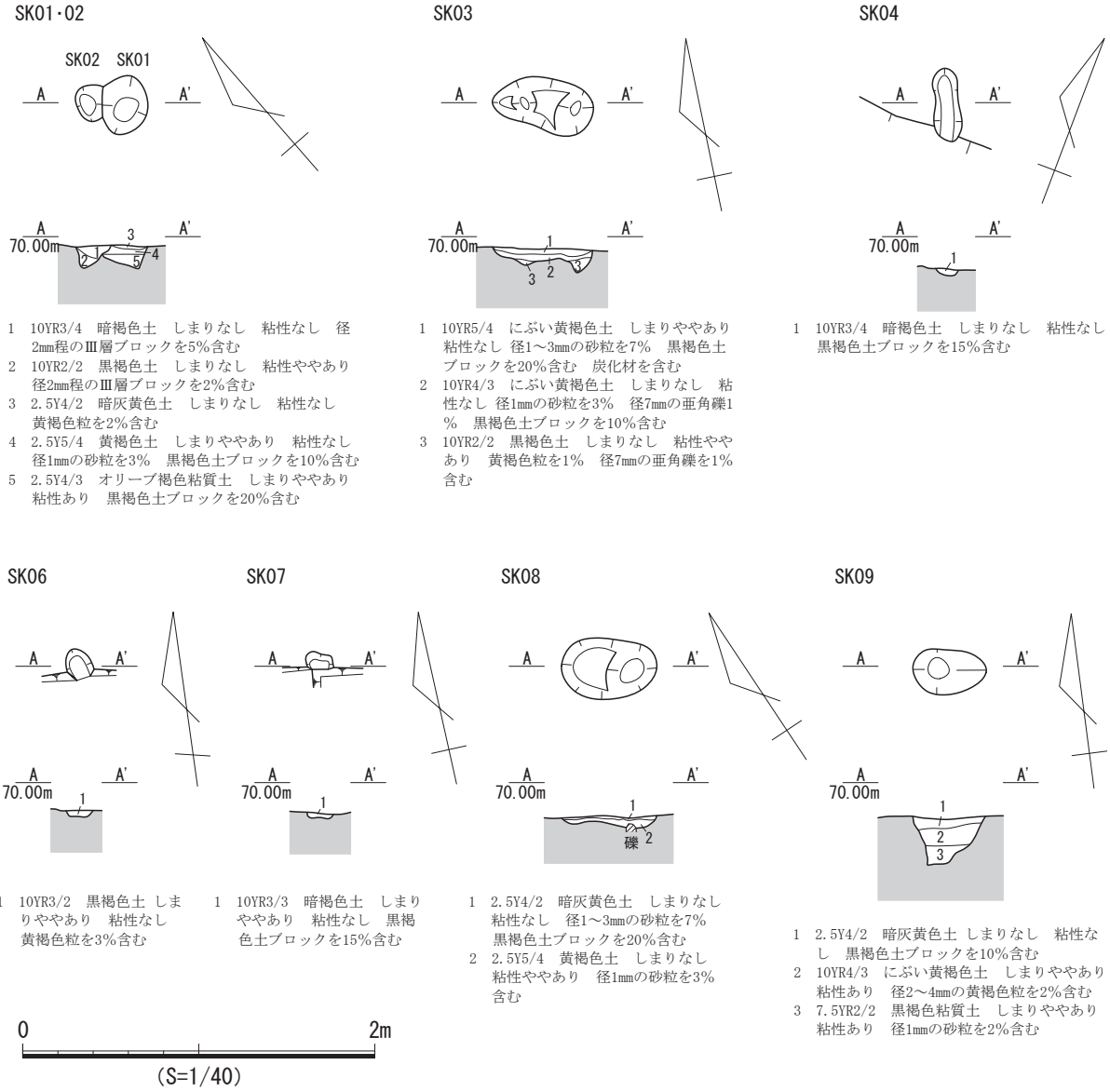


図 12　SK01～SK04・SK06～SK09

SK11

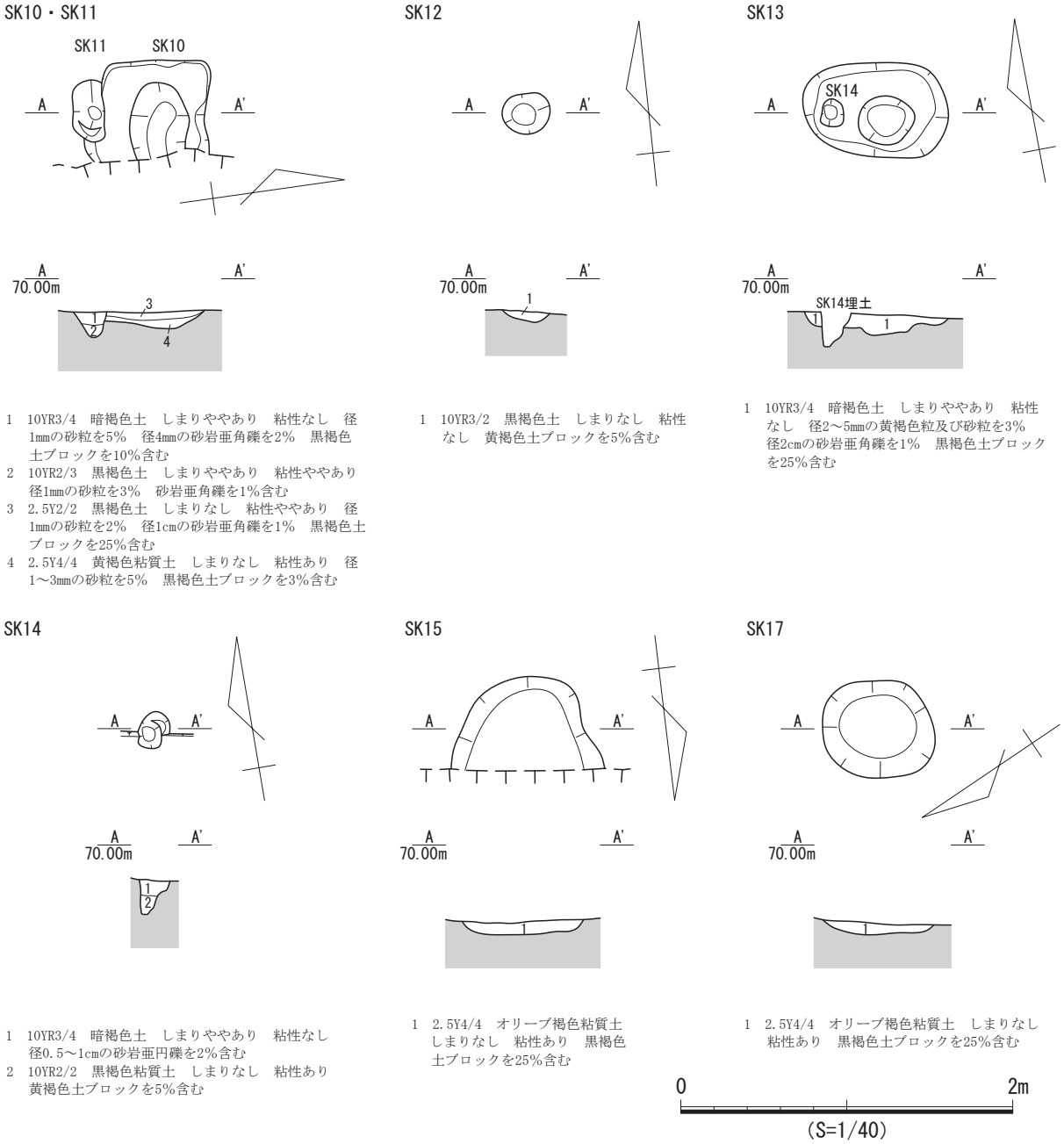
検出状況　Ｂ３グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK10 の土層断面観察時に本遺構の土層を確認したため、平面を精査して遺構の範囲を確定した。SK10 の南部で本遺構と重複し、本遺構が新しい。

形状　長軸方位がほぼ東西方向の楕円形である。底部が尖り、断面は逆三角形である。掘方は、東側に比べて西側の方が外に向かって開く。

堆積状況　埋土は２層に分層でき、水平に堆積する。埋土にブロックが混入する。

遺物土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。



SK10・SK11
1　10YR3/4　暗褐色土　しまりややあり　粘性なし　径1mmの砂粒を5%　径4mmの砂岩亜角礫を2%　黒褐色土ブロックを10%含む
2　10YR2/3　黒褐色土　しまりややあり　粘性ややあり　径1mmの砂粒を3%　砂岩亜角礫を1%含む
3　2.5Y2/2　黒褐色土　しまりなし　粘性ややあり　径1mmの砂粒を2%　径1cmの砂岩亜角礫を1%　黒褐色土ブロックを25%含む
4　2.5Y4/4　黄褐色粘質土　しまりなし　粘性あり　径1～3mmの砂粒を5%　黒褐色土ブロックを3%含む

SK12
1　10YR3/2　黒褐色土　しまりなし　粘性なし　黄褐色土ブロックを5%含む

SK13
1　10YR3/4　暗褐色土　しまりややあり　粘性なし　径2～5mmの黄褐色粒及び砂粒を3%　径2cmの砂岩亜角礫を1%　黒褐色土ブロックを25%含む

SK14
1　10YR3/4　暗褐色土　しまりややあり　粘性なし　径0.5～1cmの砂岩亜円礫を2%含む
2　10YR2/2　黒褐色粘質土　しまりなし　粘性あり　黄褐色土ブロックを5%含む

SK15
1　2.5Y4/4　オリーブ褐色粘質土　しまりなし　粘性あり　黒褐色土ブロックを25%含む

SK17
1　2.5Y4/4　オリーブ褐色粘質土　しまりなし　粘性あり　黒褐色土ブロックを25%含む

図 13　SK10～SK15・SK17

SK12

検出状況　Ｂ３グリッド、Ⅲ層上面で検出した。検出時の遺構の輪郭は明瞭であった。

形状　平面形は円形、断面は半円形である。

堆積状況　埋土は単層である。埋土に黄褐色土のブロックが混入する。

遺物土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK13

検出状況　Ａ３～Ｂ３グリッド、Ⅲ層上面で検出した。検出時の遺構の輪郭は非常に不明瞭であったが、基盤層よりもやや明るい土が斑状に広がる範囲を確認し、土坑と判断した。遺構の北部で SD01 と、西部で SK14 と重複し、本遺構は SD01 より新しく、SK14 より古い。

形状　平面形は長軸方位がＮ-80°-Wに傾く楕円形である。底面は凹凸が激しく、断面は不整な形状である。

堆積状況　埋土は単層である。埋土に黒褐色土のブロックが混入する。

遺物土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK14

検出状況　Ａ３グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK13 の土層断面観察時に本遺構の土層を確認したため、平面を精査して遺構の範囲を確定した。SD01 及び SK13 と重複し、本遺構が新しい。

形状　平面形は、不定形である。掘方は、底部付近ほど狭く、壁面東側に段をもつ。

堆積状況　埋土は２層に分層でき、水平に堆積する。埋土に黄褐色土のブロックや小亜円礫が混入する。

遺物土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK15

検出状況　Ｂ４グリッド、Ⅲ層上面で検出した。検出時の遺構の輪郭は不明瞭であった。オリーブ褐色の土が基盤層上面に斑状に広がる範囲を確認し、また、撹乱壁面の土層観察で掘方を確認したことから、土坑であると判断した。

形状　遺構の北部が撹乱と重複するため、平面形は不明である。底面はほぼ平坦で、断面は浅い皿状である。

堆積状況　埋土は単層である。埋土に黒褐色土のブロックが混入する。

遺物土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK17

検出状況　Ｂ４～Ｂ５グリッド、Ⅲ層上面で検出した。検出時の状況及び埋土は SK15 と類似する。壁面、底面ともに不明瞭である。

形状　平面形は円形である。断面は浅い皿状である。

堆積状況　埋土は単層である。埋土に黒褐色土のブロックが混入する。

遺物土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物がないため、所属時期は不明である。

３　その他の出土遺物（図 14）

表土、遺物包含層及び撹乱、試掘坑（TP１）出土及び表採した遺物について、以下に記す。

10 は遺物包含層から出土した須恵器甕の肩部である。外面には平行文タタキがみられるが、内面は当て具痕をなで消す。12・13・15 は表土中、11・14・16・17 は撹乱埋土中から出土した。11 は須恵器坏蓋の天井部である。つまみは扁平な擬宝珠状で、天井部との接合部に棒状工具による回転ナデを施す。美濃須衛窯第Ⅳ期第２～３小期に比定される。12 は灰釉陶器の碗の口縁部である。13・14 は東濃型山茶碗である。13 は口縁部で、端部は平らに仕上げ、内側に明瞭な稜をもつ。明和１号窯式に比定される。14 は底部で、内面の底部と体部の境が浅くくぼみ、籾殻痕が残る。底部には低い逆三角形の高台を貼り付ける。大畑大洞４号窯式に比定される。15 は龍泉窯系青磁碗の体部である。内面に劃花文を施す。16 はチャート製の凹基無茎鏃である。深い抉込をもち、ほぼ左右対称の形状である。側辺は、表裏から交互に押圧剥離を加えて鋸歯状側縁を作出する。17 は赤色チャート製の石核である。打点方向は一定でなく、各剥離の大きさが狭少である。18 は、試掘・確認調査時に試掘坑(TP１)から出土した、泥岩製の砥石である。砥面は一面のみで、裏面には石材の縁辺を整形するための剥離痕が残り、刃つぶし調整が認められることから、打製石斧が後世に砥石に転用された可能性がある。19 は、発掘区北側で表採した瀬戸美濃窯産の重圏皿である。内面の凸線は明瞭で、同心円状になると思われる。大窯第２段階に比定される。

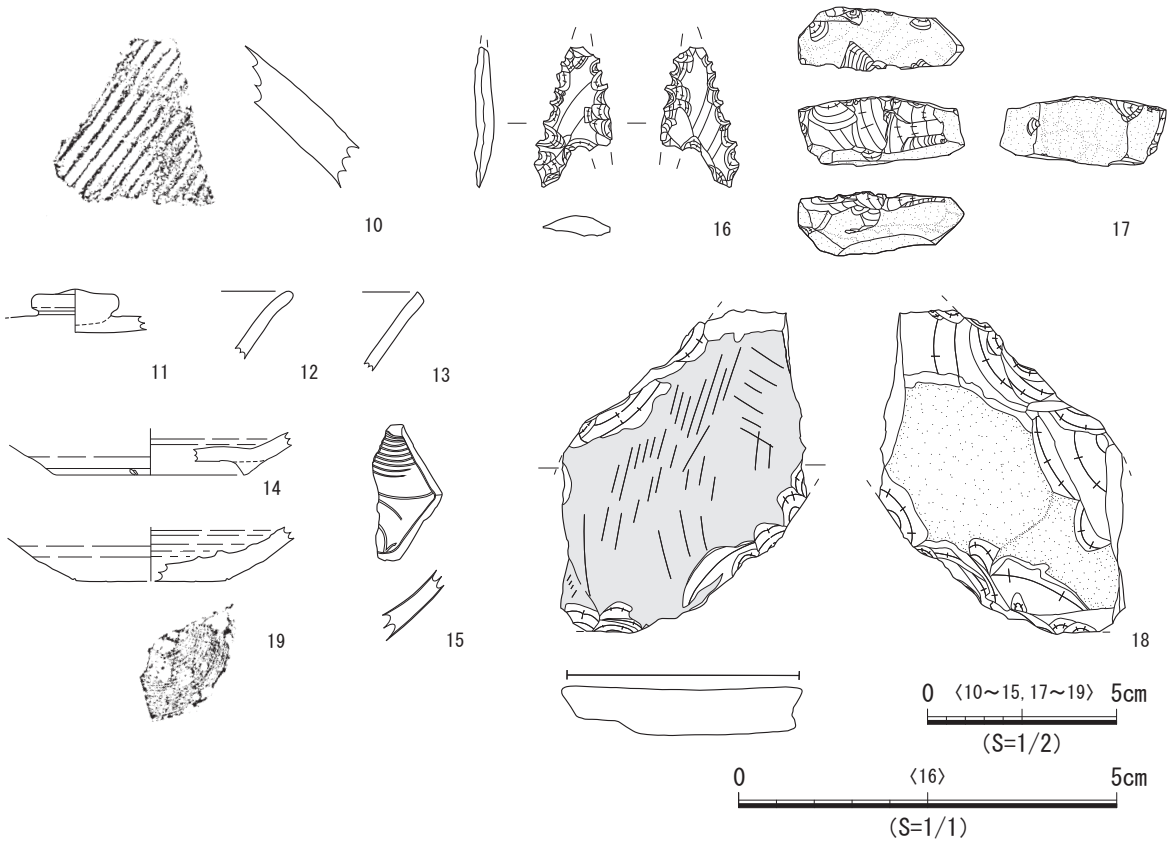


図 14　その他の出土遺物

表４　溝状遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	堆積	断面形	長軸（m）		幅（m）		深さ（m）	主軸方位	重複関係		出土遺物
	南北	東西				上端	下端	上端	下端			新	旧	
SD01	A	1～3	Ⅰ基	a	半円形	(7.6)	－	0.3	0.16	0.08	N 90.0° W N 53.2° E	SK13 SK14	SK04	
SD02	B	3～4	Ⅲ上	a	半円形	(4.2)	(4.1)	0.54	0.34	0.04	N 74.4° W			
	B	4～5	Ⅲ上	a	半円形	(1.5)	－	0.63	0.32	0.05				

表５　縄文時代の土坑一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	主軸方位	重複関係		出土遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧	
SK05	A	2	Ⅰ基	楕円形	c	半円形	0.15	0.1	0.1	0.07	0.11	N 12.6° E			J3
SK16	B	4～5	Ⅲ上	不明	b	半円形	(2.2)	(1.45)	(1.59)	(0.95)	0.33	N 57.4° W			J46 S1

表６　時期不明土坑一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	主軸方位	重複関係		出土遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧	
SK01	A	1	Ⅰ基	円形	b	逆三角	0.32	(0.27)	0.13	0.08	0.13	N 55.2° E	SK02		
SK02	A	1	Ⅰ基	円形	d	逆三角	0.3	0.12	0.2	0.09	0.12	N 19.6° E		SK01	
SK03	A	1	Ⅰ基	不定形	b	不定形	0.57	0.26	0.46	0.2	0.13	N 68.3° W			
SK04	A	2	Ⅰ基	不明	a	半円形	(0.42)	0.16	(0.37)	0.7	0.04	N 23.2° W	SD01		
SK06	A	2	Ⅰ基	楕円形	a	逆台形	(0.16)	(0.12)	0.12	0.11	(0.04)	N 14.7° W			
SK07	A	2	Ⅰ基	不明	a	逆台形	0.15	(0.1)	0.08	(0.06)	(0.05)	N 77.4° W			
SK08	B	2	Ⅰ基	楕円形	b	不定形	0.55	0.34	0.44	0.23	0.08	N 50.7° W			
SK09	B	2～3	Ⅰ基	楕円形	b	不定形	0.41	0.25	0.12	0.12	0.26	N 82.5° W			
SK10	B	3	Ⅲ上	不明	b	不定形	0.75	(0.6)	0.61	(0.58)	0.1	N 81.2° W	SK11		
SK11	B	3	Ⅲ上	不定形	b	逆台形	0.37	0.2	0.07	0.07	0.15	N 85.6° W		SK10	
SK12	B	3	Ⅰ基	円形	a	半円形	0.28	0.24	0.16	0.13	0.06	N 74.1° E			
SK13	A B	3	Ⅰ基	楕円形	a	不定形	0.89	0.57	0.68	0.46	0.12	N 79.1° W	SK14	SD01	
SK14	A	3	Ⅲ上	不定形	b	不定形	0.23	0.14	0.1	0.08	0.29	N 33.6° E		SD01 SK13	
SK15	B	4	Ⅲ上	不明	a	半円形	0.92	(0.56)	0.71	(0.49)	0.08	N 8.3° E			
SK17	B	4～5	Ⅲ上	円形	a	半円形	0.67	0.58	0.47	0.4	0.08	N 34.0° E			

表７　土器類観察表

掲載番号	種別	器種部位	出土位置			大きさ(cm)	口縁部残存率(X/12)	胎土	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	文様(幅単位cm)	分類・時期	備考	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位	口径 底径 器高										
1	縄文土器	深鉢口縁部	B5	SK16	1	(21.0) － (3.65)	1	やや粗（φ2mm以下の長石・石英を多く含む）	良好	5YR 5/6 7.5YR 6/6 10YR 4/1	ナデ／ナデ	LR縄文施文後に半截竹管沈線文（0.4）	縄文時代前期	－	12	5
2	縄文土器	深鉢胴部	B5	SK16	2	－ － (2.8)	－	やや粗（φ2mm以下の長石・石英を多く含む）	良好	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6 2.5Y 4/1	ナデ／ナデ	隆帯上に半截竹管の連続刺突（0.4） 隆帯貼付後、LR縄文	縄文時代前～中期	－	12	5
3	縄文土器	深鉢胴部	B4	SK16	b	－ － (1.8)	－	やや粗（φ3mm以下の長石・石英・チャートを多く含む）	良好	7.5YR 7/6 5YR 7/8 2.5Y 3/2	ナデ／ナデ	RL縄文	縄文時代	－	12	5
4	縄文土器	深鉢頸部付近	B5	SK16	－	－ － (2.8)	－	やや粗（φ3mm以下の長石・石英含む）	良好	10YR 4/2 5YR 5/4 10YR 3/2	ナデ／ナデ	RL縄文	縄文時代	外面に明瞭な屈曲	12	5
5	縄文土器	深鉢胴部	B5	SK16	1	－ － (4.8)	－	やや粗（φ2mm以下の長石・石英を多く含む）	良好	7.5YR 7/6 7.5YR 6/6 7.5YR 5/4	ナデ／ナデ	縄文	縄文時代	－	12	5
6	縄文土器	深鉢胴部	B5	SK16	1	－ － (3.1)	－	やや粗（φ2mm以下の長石・石英を多く含む）	普通	7.5YR 5/4 7.5YR 4/2 7.5YR 4/1	ナデ／ナデ	－	縄文時代	－	12	5
7	縄文土器	深鉢口縁部	B5	SK16	1	－ － (2.0)	1	やや粗（φ2mm以下の長石・石英をわずかに含む）	良好	10YR 7/6 10YR 7/6 10YR 4/2	ナデ／ナデ	－	縄文時代	下端部に輪積痕	12	5
8	縄文土器	深鉢胴部	B5	SK16	1	－ － (1.8)	－	やや粗（φ2mm以下の長石・石英多く含む）	普通	7.5YR 6/6 10YR 4/3 10YR 4/2	ナデ／ナデ	－	縄文時代	－	12	5
10	須恵器	甕肩部	TP3	－	Ⅱ	－ － (3.7)	－	密（φ1mm以下の長石・石英をわずかに含む）	良好	10YR 6/1 5Y 5/2 5Y 6/1	平行タタキ／斜方向の静止ナデ	－	－	外面に自然釉付着	15	5
11	須恵器	坏蓋天井部	B4	－	－	－ － 1.2	－	密（φ2mm以下の長石・チャートをわずかに含む）	良好	5Y 7/1 7.5Y 7/1 2.5Y 7/2	ナデ/回転ナデ	－	美濃須衛窯第Ⅳ期第2～3小期	扁平なつまみ	15	5
12	灰釉陶器	碗口縁部	A2	－	Ⅰ	－ － (1.85)	1	密（φ1mm以下の長石わずかに含む）	良好	2.5Y 7/2 2.5Y 7/2 2.5Y 6/1	回転ナデ／回転ナデ	－	美濃窯	内外面に自然釉付着	15	5
13	山茶碗	碗口縁部	A1	－	Ⅰ	－ － (2.1)	1	密（φ1mm以下の長石わずかに含む）	良好	2.5Y 8/1 7.5Y 7/1 5Y 7/1	回転ナデ／回転ナデ	－	東濃型	内外面に自然釉付着	15	5
14	山茶碗	碗底部	B3	－	－	－ (5.0) (0.8)	－	密（φ1mm以下の石英わずかに含む）	良好	2.5Y 8/3 2.5Y 8/3 2.5Y 8/3	回転ナデ、籾殻痕／回転ナデ、糸切痕、籾殻痕	－	明和1号窯式～大畑大洞4号窯式	－	15	5
15	陶磁器	碗体部	－	－	Ⅰ	－ － (1.4)	－	密（φ1mm以下の石英をわずかに含む）	良好	7.5Y 6/2 7.5Y 6/2 5Y 7/1	回転ナデ／回転ナデ	内面に劃花文	龍泉窯系青磁	内外面に施釉	15	5
19	陶磁器	重圏皿底部	－	－	表採	－ (4.0) (2.0)	－	密（φ2mm以下の長石をわずかに含む）	良好	N 4/0 N 6/0 N 7/0	回転ナデ／回転ナデ、糸切痕	－	大窯第2～3段階	－	15	5

表８　石器・石製品観察表

掲載番号	器種	出土位置			石材	大きさ(cm)			重さ(g)	備考	挿図番号	図版番号
		出土区・グリット	遺構番号	層位		長さ	幅	厚さ				
9	打欠石錘	B4	SK16	1	砂岩	5.60	4.20	1.60	54.8	礫の片側に帯状痕跡が残る。	12	5
16	石鏃	B4	－	－	チャート	1.85	1.10	0.24	0.4	凹基無茎鏃、鋸歯状側縁	15	5
17	石核	B4	－	－	チャート	4.40	1.80	1.10	17.6	作業面は１面、自然面に打点がある。	15	5
18	砥石	TP1	－	－	泥岩	9.95	6.00	1.20	92.0	打製石斧が後世に砥石に転用された可能性がある。	15	5

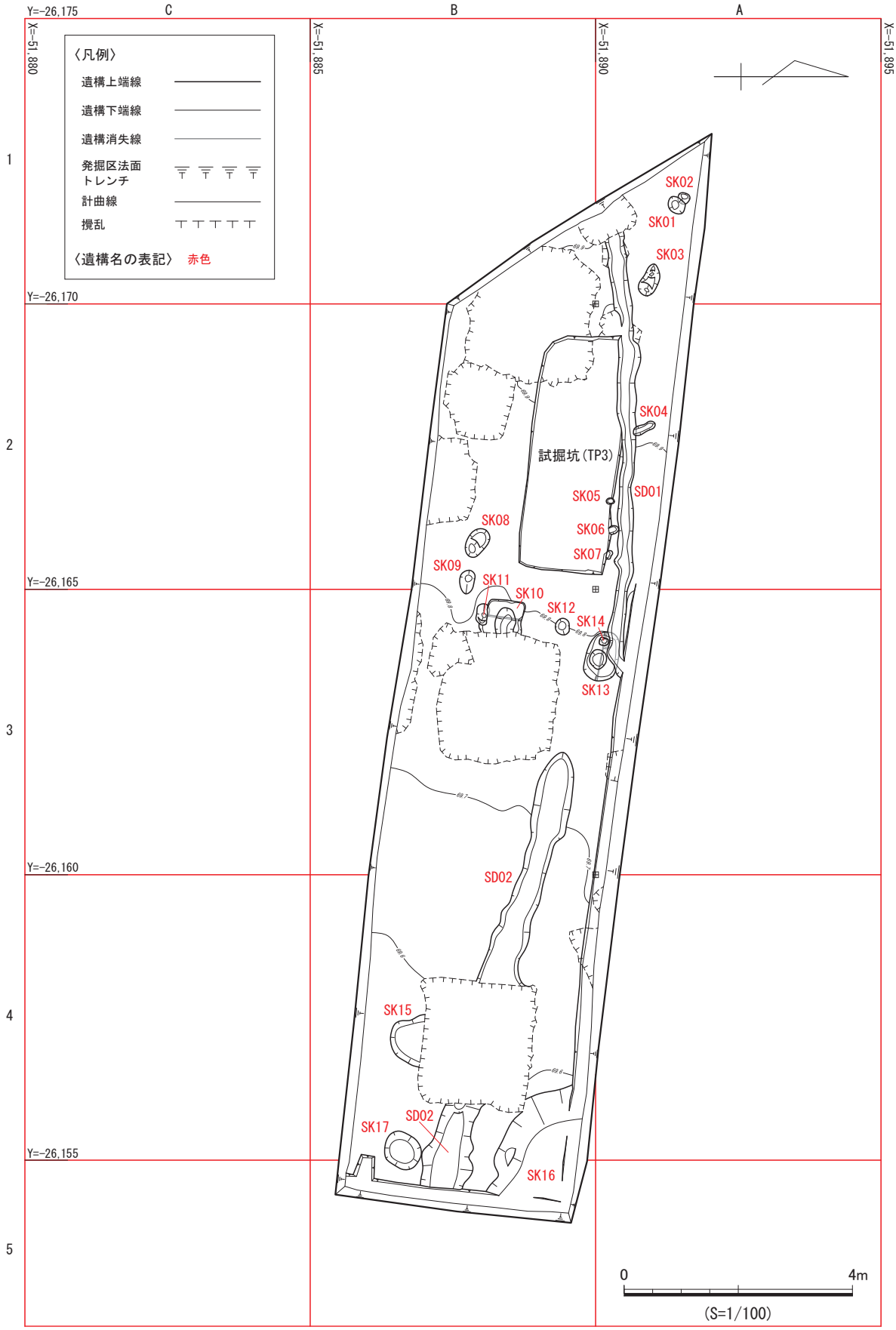

Y=-26,175
C
B
A
X=-51,880
X=-51,885
X=-51,890
X=-51,895
〈凡例〉
遺構上端線
遺構下端線
遺構消失線
発掘区法面
トレンチ
計曲線
攪乱
〈遺構名の表記〉 赤色
1
2
3
4
5
Y=-26,170
Y=-26,165
Y=-26,160
Y=-26,155
SK02
SK01
SK03
SK04
試掘坑(TP3)
SK05
SD01
SK06
SK07
SK08
SK09
SK11
SK10
SK12
SK14
SK13
SD02
SK15
SK17
SD02
SK16
0
4m
(S=1/100)

図 15　発掘区全域図

第４章　自然科学分析

第１節　分析の概要

ここでは、SK16 埋土について実施した花粉分析及びプラント・オパール分析結果について述べ、遺跡周辺の古環境を検討する。これまでに遺跡周辺では複数の発掘調査が実施されているが、そのうち当遺跡から 0.3km 南東の渡来川北遺跡では、縄文時代草創期の配石遺構の覆土及び埋土について花粉分析が行われ、クワ科・キク亜科・単条型胞子が産出された（美濃市教育委員会 2008）。また、当遺跡から 1.0km 東の茶屋下遺跡では、12～15 世紀の溝状遺構の埋土最下層を対象に花粉分析を実施し、アカガシ亜属やコナラ亜属等の樹木花粉やイネ科やカヤツリグサ科等の草本花粉、シダ植物胞子を産出した（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2004）。

今回の分析の結果、花粉化石が検出できなかったことから、SK16 の埋没過程で好気的環境にあった可能性がある。プラント・オパール分析ではネザサ節型を検出したことから、SK16 周辺は日当たりの良い開けた場所であり、一方、ヨシ属を検出し、SK16 の周辺には湿地的環境が存在したと考えられる。

以上、分析結果を概観したが、花粉化石が産出できなかったこともあり、先述の２遺跡を含めても古環境を検討する十分な資料を得るには至らなかった。今後の資料の増加を待ちたい。

第２節　SK16 の花粉分析及びプラント・オパール分析

以下に、SK16 の埋土から採取した試料について行った花粉分析とプラント･オパール分析の結果と、遺跡周辺の古植生などについて検討した結果について示す。分析は森将志（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

１　試料と方法

分析試料は、縄文時代前期の土器片が出土する土坑 SK16 の２層（A-A’断面）から採取された黒褐色（5YR2/1）シルト１点である。この試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

（１）花粉分析

試料（湿重量約３g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10 分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、１時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは全面を検鏡した。

（２）プラント･オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１g（秤量）をトールビー

カーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30%の過酸化水素水を約 20～30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定及び計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、写真３に載せた。

２　結果

（１）花粉分析

検鏡の結果、試料から花粉は検出されなかった。花粉化石が検出されなかったため、図表や図版は作成していない。

（２）プラント･オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１g 当りの各プラント・オパール個数を求め（表９）、分布図に示した（図 16）。

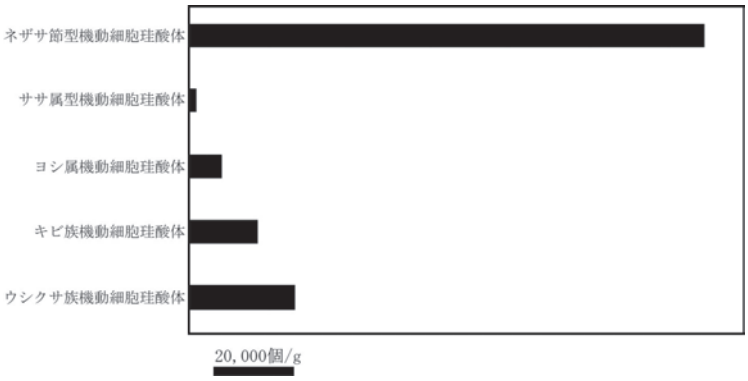


図 16　植物珪酸体分布図

表９　試料１g当りのプラント・オパール個数

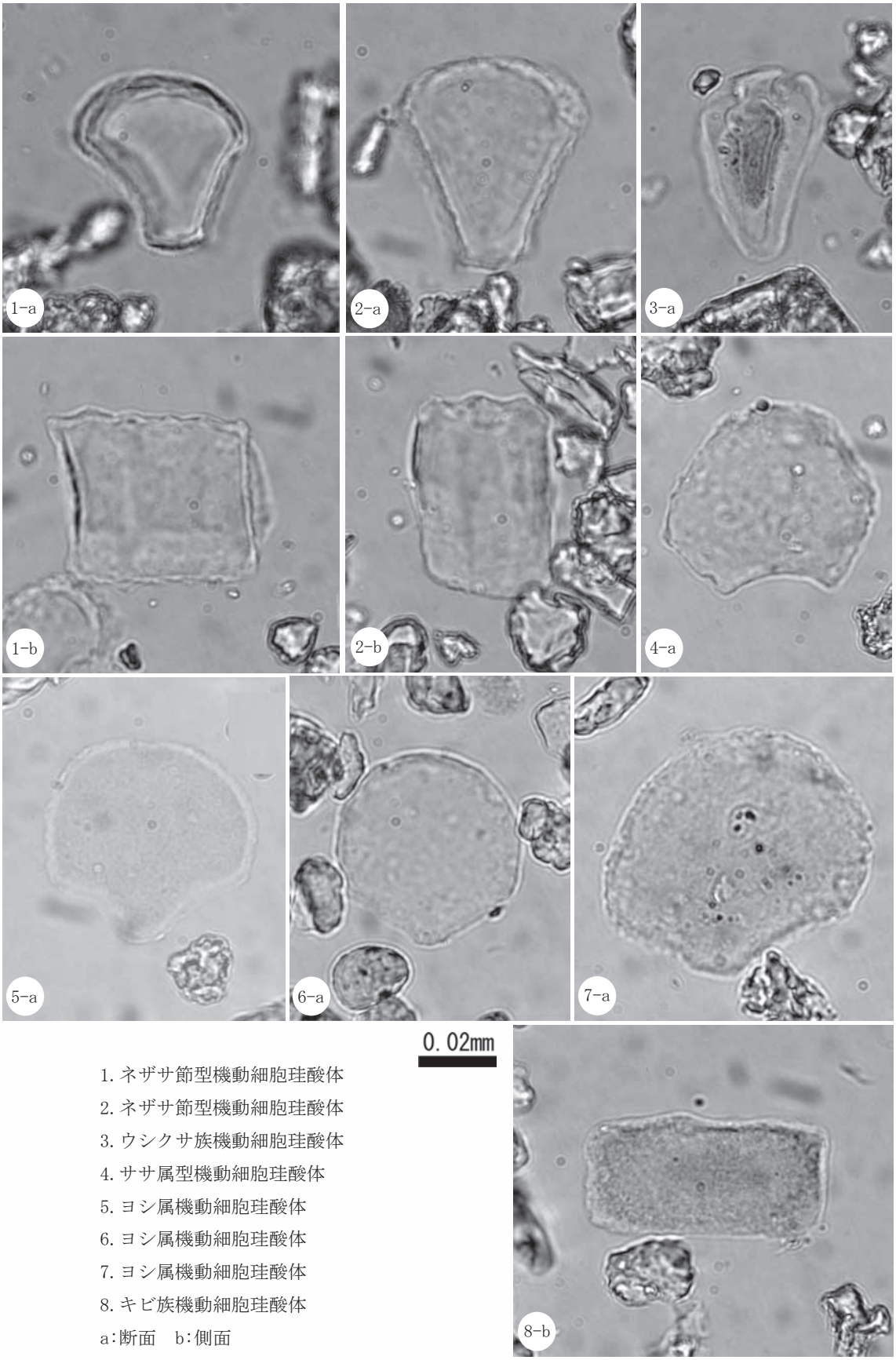
ネザサ節型（個/ｇ）	ササ属型（個/ｇ）	ヨシ属（個/ｇ）	キビ族（個/ｇ）	ウシクサ族（個/ｇ）	不明（個/ｇ）
128,800	1,600	7,800	17,100	26,400	15,500

検鏡の結果、ネザサ節型機動細胞珪酸体とササ属型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の５種類の機動細胞珪酸体の産出が確認できた。

３　総括

検鏡の結果、試料からは花粉化石が得られなかった。一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると、紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。SK16 の２層は、堆積時若しくは堆積後において、好気的環境に晒されていた可能性がある。一方で、植物珪酸体はガラス質であるため、乾燥的環境においても良好に保存される。以下では、試料から産出した植物珪酸体に基づき、遺構周辺のイネ科植物相について検討した。

検出された分類群の中で、最も産出量が多いのがネザサ節型である。よって、SK16 周辺にはネザサ節のササ類が分布を広げていたと考えられる。また、ササ属やキビ族、ウシクサ族の機動細胞珪酸体の産出も見られ、SK16 周辺にはササ属やキビ族、ウシクサ族といったイネ科植物も生育していた可能性がある。さらには、抽水植物のヨシ属の機動細胞珪酸体の産出もみられ、SK16 周辺には湿地的環境が存在し、そこにはヨシ属が生育していた可能性がある。



1. ネザサ節型機動細胞珪酸体
2. ネザサ節型機動細胞珪酸体
3. ウシクサ族機動細胞珪酸体
4. ササ属型機動細胞珪酸体
5. ヨシ属機動細胞珪酸体
6. ヨシ属機動細胞珪酸体
7. ヨシ属機動細胞珪酸体
8. キビ族機動細胞珪酸体

a:断面　b:側面

写真３　SK16 から産出した植物体珪酸体

第５章　総括

本章では、今回の調査成果について、周辺遺跡との調査成果等と比較することで地域における歴史的意義について検討する。

今回の調査では、縄文時代の土坑２基、時期不明土抗 15 基、溝状遺構２条を検出した。このうち SK16 で出土した縄文土器（図 12-１）は、細片であるが、前期後葉に所属する可能性が高い。近隣における当該時期の資料には、当遺跡から西へ約 2.7km に位置する八幡遺跡（関市武芸川町）の資料がある。八幡遺跡は、昭和 38 年に南山大学文化人類研究所が発掘調査を行った遺跡であり、出土した縄文土器は、北白川下層Ⅰ～Ⅱ式及び諸磯ｂ式に比定されている[1]。一方、当遺跡の周辺では、発掘調査によって縄文時代の遺構や遺物が確認されている（表 10[2]）。渡来川北遺跡では、草創期後半の石器製作跡や水場遺構、早期の焼礫集石遺構等、井守山遺跡では、竪穴状遺構と屋外埋甕が検出された。しかし、当遺跡が立地する長良川右岸の砂礫段丘上で前期の土器が出土したのは、今回の調査が初めてであり、縄文時代前半において当遺跡の周辺が断続的に土地利用されていたことが判明した。ただし、明確な集落跡は未だ確認されていないため、縄文時代の土地利用の検討については、今後の資料の増加を待ちたい。

表10　大屋敷遺跡周辺の縄文時代の遺跡

番号	遺跡名	時期	遺構	遺物	
				土器	石器
1	大屋敷遺跡	前～中	土坑	○	○
2	渡来川北遺跡	草創・早・中	石器製作跡 水場遺構 焼礫集石遺構	○	○
3	碁盤洞遺跡	（詳細時期不明）	土坑	？	？
11	中屋敷遺跡	中末	集石土坑	○	○
19	井守山遺跡	中	竪穴状遺構、埋甕	○	打製石斧表採
20	樋口遺跡	（詳細時期不明）	石器集中地点	－	○
21	垣内遺跡	（詳細時期不明）	土坑	細片のみ	○
22	一本杉遺跡	前～中	自然流路 土坑	細片のみ	○
23	茶屋下遺跡	前～中	石器埋納遺構	－	○

※番号は、表１及び図５に対応している。

今回の調査では、溝状遺構 SD01・SD02 を検出した。当遺跡の北東側に所在する中屋敷遺跡は、平成 10 年度に美濃市教育委員会によって発掘調査が実施され、中世及び近代以降の溝状遺構が検出された[3]。図 19 は明治時代の字絵図に本遺跡と中屋敷遺跡の発掘区を重ねた図である。中屋敷遺跡で検出された溝状遺構のうち、中世以前のものを「旧」、中世よりも新しいものを「新」として区別した（図 19 左上）。中屋敷遺跡における中世以前の溝状遺構の主軸方位は字絵図の地境の方向と一致しないものがみられ、この時期の屋敷地は字絵図とは異なる地割の方向で区画されていたと考えられる。一方、中世よりも新しい溝状遺構[4]は、字絵図の地境と平行又は直行する主軸方位で設置されており、字絵図の地割が比較的新しいことがわかる。当遺跡の SD01 は、発掘区中央付近で北向きに方向を変えるものの、「大屋敷」と「桧本」の字境とほぼ平行する。中屋敷遺跡の周辺同様、「大屋敷」の字絵図の地割も新しいとすれば、SD01 は時期的に新しい可能性がある。なお、SD02 は周囲の地割と主軸の方位が一致せず、現段階では時期及び性格は不明である。また、図 19 の字名をみると、発掘区の北西に「中屋敷」が存在する。「中屋敷」には、先述した中屋敷遺跡があり、中世の大溝から多量の土師器皿や木製品が出土したことから、「居館又はそれ以上の構造物」（美濃市教育委員会 1999）の存在が推定されている。この「中屋敷」は、「東側」「北側」「西側」「西出」「西田」「南出」といった字に囲まれており、当該地域が「中屋敷」を中心とした地域であることが考えられる。おそらく「中屋敷」の屋敷地を中心とした居住域が展開していたのだろう。対して、今回の発掘区は、同じく屋敷地の存在を示す字名の可

図 17　周辺の地籍及び字絵図

能性がある「大屋敷」に近いが、居住域に関する遺構は確認できなかった。これは、発掘区が「桧本」という字に所在することから屋敷地から外れているためで、「大屋敷」では中屋敷遺跡に類似する遺構が検出される可能性が残る。

当遺跡を含め周辺では比較的多くの発掘調査が実施され、長良川右岸の段丘上における歴史的様相が少しずつ明らかになりつつある。今後の調査に期待したい。

注

１）新修武芸川町史編纂委員会 2004『新修武芸川町史』では、平行沈線文を有する土器を「北白川下層Ⅱ式」としているが、資料を保管する南山大学人類学博物館では、その大半を「諸磯ｂ式」として扱っている。

２）表 10 の作成に当たって、以下の文献を参照した。

財団法人岐阜県教育文化財団 2004『一本杉・茶屋下・改田遺跡　栗坪遺跡』

美濃市教育委員会 1999『中屋敷遺跡』

美濃市教育委員会 2002『垣内遺跡』

美濃市教育委員会 2004『渡来川北遺跡　縄文時代草創期の調査』

美濃市教育委員会 2008『渡来川北遺跡』

美濃市教育委員会 2013『樋口遺跡』

なお、井守山遺跡の時期については、『中屋敷遺跡』（美濃市教育委員会 1999）17 頁の「縄文中期の遺構は、（中略）渡来川北遺跡群井守山遺跡で確認されている。」という記述を参照した。

３）美濃市教育委員会 1999『中屋敷遺跡』

４）中屋敷遺跡の中世よりも新しい溝状遺構には、中世の土師器が多数出土した SD03 埋没後に掘削されたもの（SD02）と、近代以降の新しい時期と判断されたもの(SD05・SD06)を含む。

引用・参考文献

伊藤聡・牛丸岳彦・清山健・田中弘志・成瀬正勝 1999「美濃市殿岡古墳群の研究１－１号墳の石室実測報告―」『美濃の考古学』第３号、美濃の考古学刊行会 68－73 頁

宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集、国立歴史民俗博物館

岐阜県 1972『岐阜県史』（通史編原始）

岐阜県 1981『岐阜県地質鉱産図概説』

岐阜県 2003『岐阜県史』（考古資料）

岐阜県企画部地域振興課 1993『岐阜県土地分類基本調査「美濃」』

小林達雄・小川忠博 1989『縄文土器大観』（１、草創期 早期 前期）、株式会社小学館

小林達雄編 2008『総覧　縄文土器』、株式会社アムプロモーション

財団法人岐阜県文化財保護センター1995『下巾上遺跡』

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2004『一本杉・茶屋下・改田遺跡　栗坪遺跡』

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『重竹遺跡・上西田遺跡』

佐原眞 1981「特論　縄文施文法入門」『縄文土器大成』（３、後期）、株式会社講談社
新修武芸川町史編纂委員会 2004『新修武芸川町史』
清山健・田中弘志・成瀬正勝 2000「美濃市殿岡古墳群の研究２－１号墳の墳丘測量報告―」『美濃の考古学』第４号、美濃の考古学刊行会 72-77 頁
関市教育委員会「重竹遺跡　調査総括」『関市市内遺跡発掘調査報告書　平成 21 年度』、７-９頁
辻誠一郎編 2000『考古学と植物学』（考古学と自然科学③）、同成社
藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター　研究紀要』第３号、三重県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 2005「施釉陶器生産技術の伝播」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集、全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
町田勝則 1996「石器の研究法―報告文作成に伴う観察・記録法①―」『長野県の考古学』（（財）長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ）、（財）長野県埋蔵文化財センター139-171 頁
美濃市 1979『美濃市史』（通史編上巻）
美濃市教育委員会 1989『美濃市西南部古窯址群』
美濃市教育委員会 1997『南山遺跡』
美濃市教育委員会 1999『美濃市遺跡分布地図』
美濃市教育委員会 1999『中屋敷遺跡』
美濃市教育委員会 2002『垣内遺跡』
美濃市教育委員会 2004『渡来川北遺跡　縄文時代草創期の調査』
美濃市教育委員会 2008『渡来川北遺跡』
美濃市教育委員会 2012『美濃観音寺山古墳・長福寺遺跡・西観音寺遺跡・東観音寺遺跡』
美濃市教育委員会 2013『樋口遺跡』
美濃市教育委員会 2014『観音堂遺跡他』
美濃市郷土史編纂委員会 1964『美濃市の歴史』、美濃市小中学校校長会
山本信夫 1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』、真陽社
渡辺博人 2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会 2008 年愛知大会研究発表資料集』

写　真　図　版

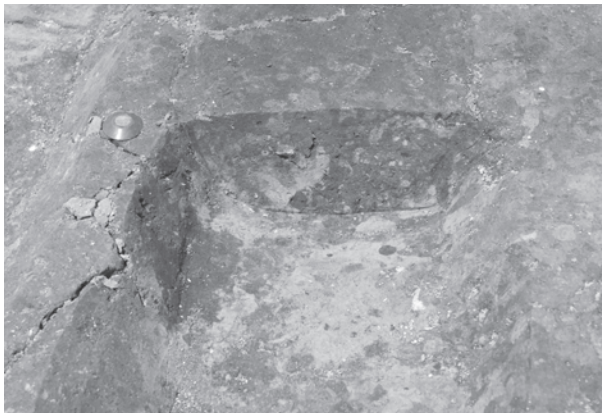
図版１　調査前風景・発掘区全景

調査前風景（北東から）

発掘区全景（北西から）

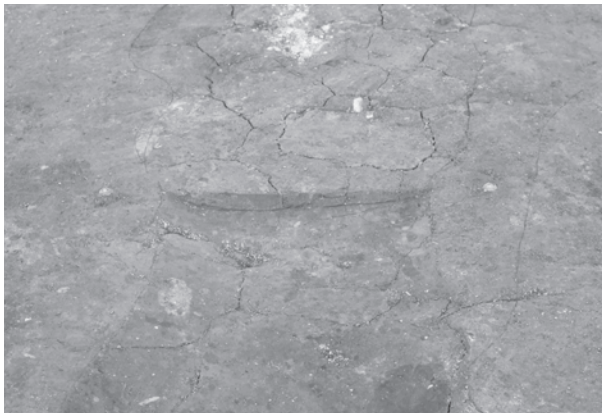
SD01　完掘状況（北東から）

SD01　A-A’土層断面（東から）



SD01　B-B’土層断面（東から）

SD02　西部完掘状況（南東から）



SD02　東部土層断面（西から）

SD02　東部完掘状況（西から）

図版３　SK16　断面・完掘

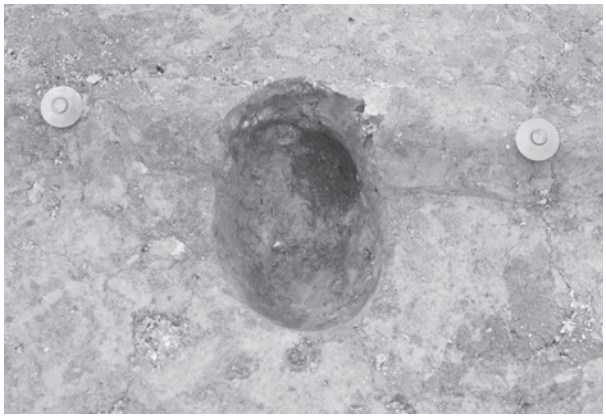
SK16　土層断面（北西から）

SK16　完掘状況（南西から）

SK01・SK02　完掘状況（南から）

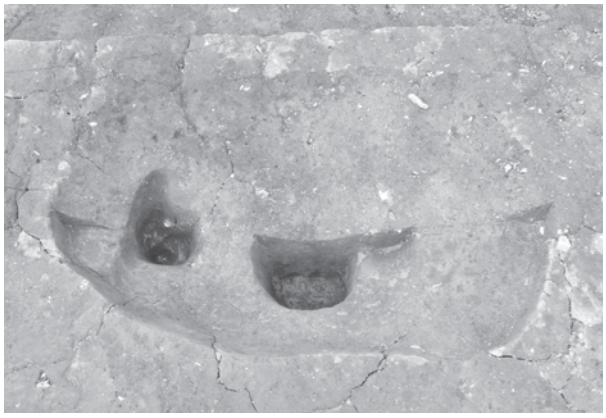
SK03　完掘状況（南西から）

SK05　検出状況（南から）

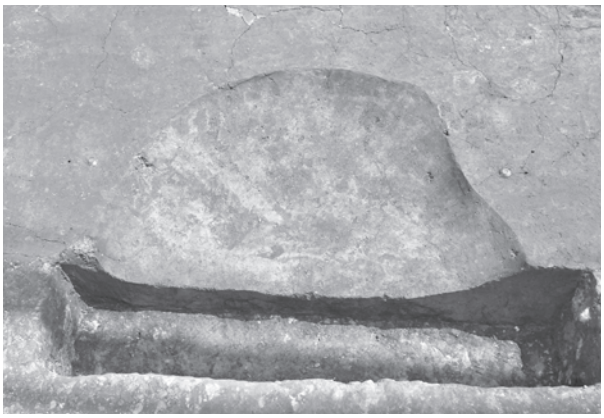


SK05　完掘状況（南から）

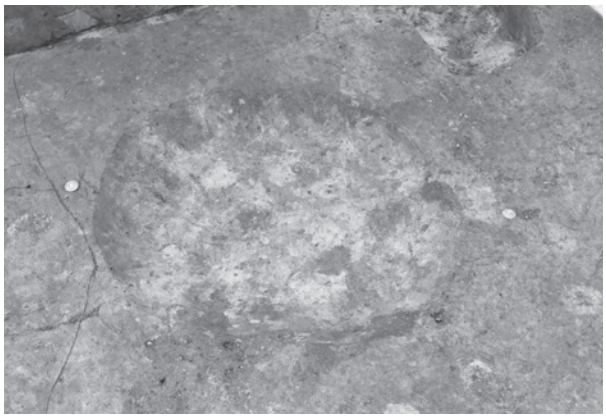
SK10・SK11　完掘状況（東から）



SK13・SK14　完掘状況（南から）

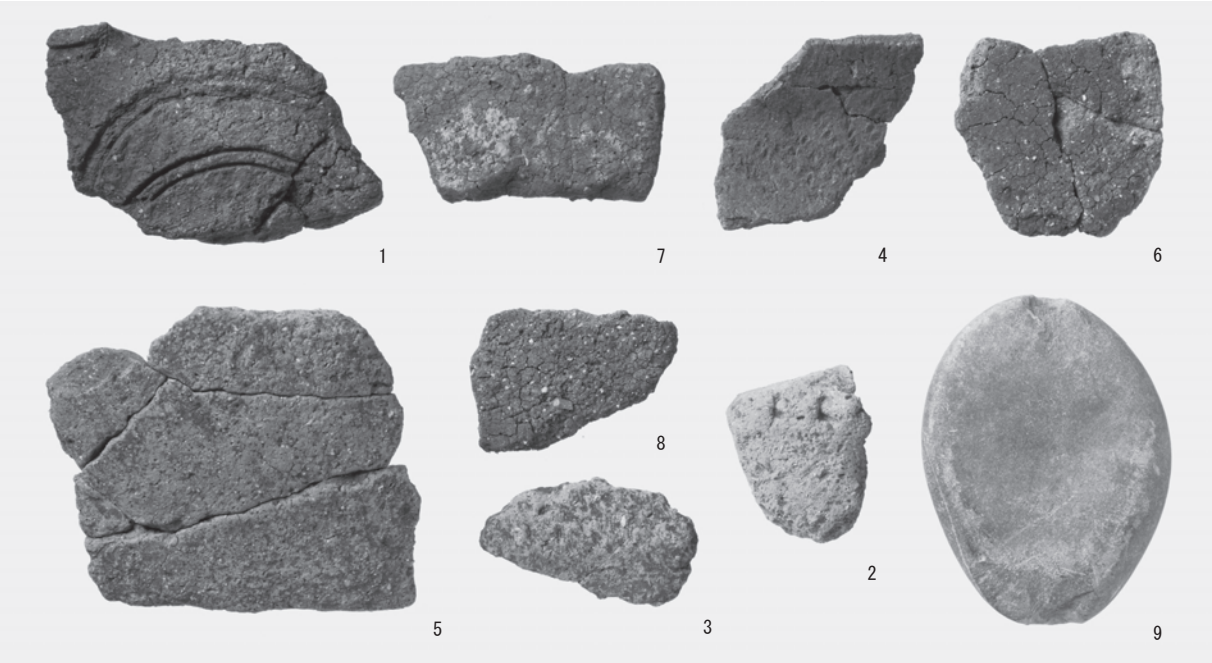


SK15　完掘状況（北から）

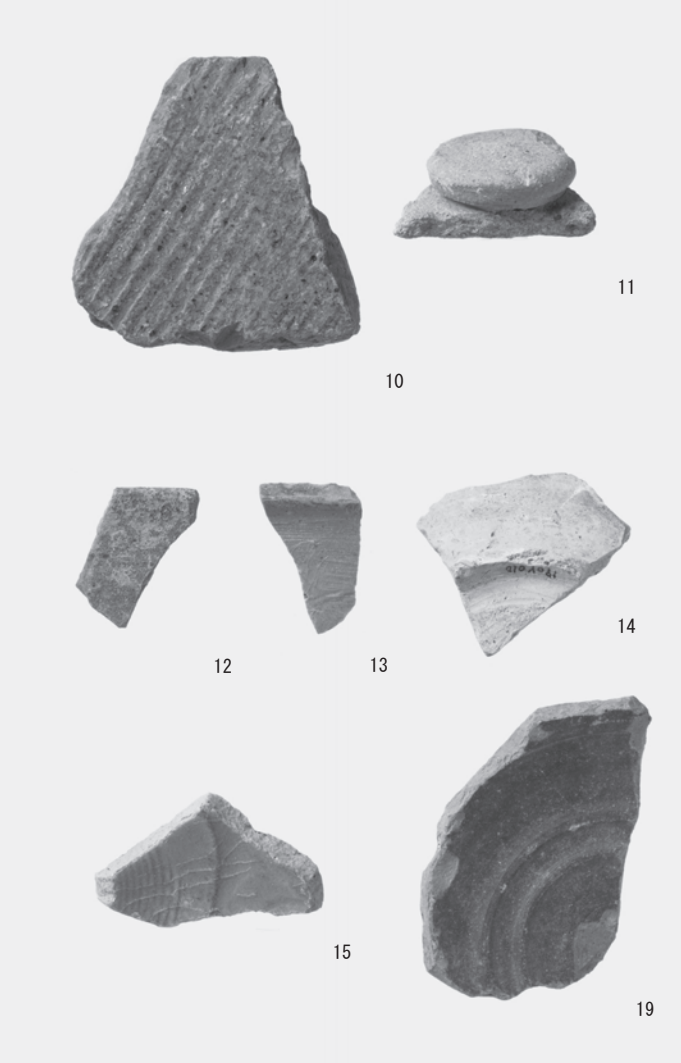


SK17　完掘状況（南西から）

図版５　出土遺物



SK16 出土　縄文土器・打欠石錘



その他の出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおやしきいせき
書名	大屋敷遺跡
副書名	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第153集
編著者名	辻田真穂
編集機関	岐阜県文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜市三田洞東1-26-1　TEL058-237-8550　FAX058-237-8551
発行年月日	2020年３月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
おおやしきいせき 大屋敷遺跡	岐阜県(ぎふけん) 美濃市(みのし) 大字(おおあざ) 大矢田(おやだ)	21207	9208	35°53’19”	136°87’81”	20190508 ～ 20190603	100.0	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大屋敷遺跡	散布地	縄文時代	溝状遺構２条 土坑　17基	縄文土器　54点 須恵器　２点 灰釉陶器　１点 山茶碗　15点 中世陶磁器　３点 石器・石製品　５点	縄文土器を伴う土坑を２基確認した。

要　約	大屋敷遺跡は、遺跡の南側を東流する長良川の支流、渡来川によって形成された段丘上に位置する。検出した土坑のうち、SK16からは縄文時代前期～中期と考えられる土器と打欠石錘が出土した。長良川右岸の砂礫段丘上で前期の土器が確認されたのは今回の調査が初めてであり、当該地周辺で縄文時代草創期から中期にかけて断続的に土地利用されていたことが判明した。この他、時期不明の溝状遺構２条と土坑15基を検出した。

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第153集

大 屋 敷 遺 跡

2021年３月 15 日

編集・発行　岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1
印　　刷　もとすいんさつ株式会社